

次ページへ続く

Continued on next page...

# 資料紹介 U・C・バークレー校蔵『古事類』

——もう一つの『連集良材』——

渡 辺 守 邦

海外科研の費用によって、今はカリフォルニア大学バークレー校東亜図書館 (East Asiatic Library) に所蔵される三井文庫本を調査したのは、昭和五十八年のことであった。戦前は非公開の私設図書館であり、昭和二十五年に海を渡って以降、ますます利用の便を欠いたこのコレクションは、しかし『国書総目録』に「旧三井」と著録されていて、研究者のいらだちを募らせる存在であった。

海外科研による三井文庫の調査は、写本を対象に採りあげて行なった。他の三井本がカード目録による検索の可能であるなかに、写本は秩序を乱した状態で一括別置されていて、三井文庫本の全体像を掌握するうえでのネックになりかねない、と判断したところからである。その成果は、「カリフォルニア大学バークレー校旧三井文庫写本目録稿」として本誌第五号 (昭和59・3) に発表した。本誌第八号および本号に追補のあることも、言い添えておく必要がある。

その後、今度は東亜図書館の企画により、大阪大学矢守一彦氏、当館

岡雅彦氏ら日本人の専門家を招いて、地図および版本の整理がスタートした。やがて冊子体の目録として公刊されることになるはずであるが、そうすると、朝鮮本の浅見文庫、明清刊本の今関文庫、聴水閣法帖コレクション (いずれも別置) の目録に併せて、東亜図書館に所蔵される旧三井文庫本の目録化が、全て終ることになる。写本目録が、かかる機運の誘発剤となったのであったとしたならば、目録作成メンバーの一員として、望外の喜びを禁ずることができない。

海外科研による三井文庫調査は、長谷川強、伊井春樹、日野龍夫の諸氏との共同研究であり、写本目録の発表によって責を果たしたのであったが、実は、さらに、旧三井文庫写本のうちから稀本、善本を選んでマイクロ・フィルムを取り寄せ、解題を添えて紹介することを、最終の目的とするものであった。プロジェクト・チームを解散した後、善本解題式のままだった形にすることは困難になったが、各人がそれぞれの研究活動の一端として、この課題を果たすことにし、その努力が現在も続け

られている。たとえば、

伊井春樹氏「パークレイ校蔵『古今和歌集聞書』一異本『十口集』

についで―」（大阪青山短大國文）二 昭61・2）

長谷川強氏『あやしぐさ（霊怪艸）』（古典文庫四八三 昭62・1）

長谷川強氏「カリフォルニア大学パークレー校旧三井文庫本『耳

囊』」（かがみ）二十六 昭62・3）

などがそれ、である。

本稿は諸氏の驥尾に付し、学界未見の連歌学書を翻刻し、あわせてその概要を紹介してみようとするものである。ただ、いささかお門違いの者がしゃしゃり出て、正鵠を期しがたいきらいはないか、発表の場としてはたして本誌が適当であったか、との懸念を消しがたいが、如上の趣旨に基づくものとして、お許しいただきたく思う次第である。

＊

ここに紹介しようとする連歌学書とは、『古事類』である。書誌のあらましは次のごとし。

写 半紙本袋綴一冊 [寸法] 23・4×17・0センチ [本文行

数] 各半丁九行 [丁数] 全一一九丁（目次三丁、本文一一五丁、

巻末遊紙一丁）〔外題〕「古事類」〔内題〕「故事本語本説連歌聞書

上」〔印記〕「高堅所集」「三井家」（巻頭）「大正十五年所聚」（巻

末）〔奥書・識語等〕なし [整理番号] 写一一五二（旧三井番

号A九一〇／新／六八）

新町三井家第九代の三井高堅の集書。奥書、識語に類するものがなく、

かつ時代的特徴をつかみにくい筆跡であって、書写年時を明らかにしないが、明暦万治ころか。同筆および別筆の書入を交える。

内容について詳しくは後に述べるが、総称を「古事類」とする複数の書留めを収めるものらしい。ただ、途中に何箇所かの脱落があつて、それぞれの名称を不明確にしている。よつて、脱落の検討を手がかりに、内容を明らかにしてみたいと思う。

脱落は本書の親本にすでに生じていたものらしい。脱落について言うまゝに、本書が原本ではなく、転写本であることを確かめておく必要がある。93「銜壳故事」（93は所収の各項目に与えられた通し番号。凡例にも述べるが、底本では漢数字。いま洋数字に直して使用する）に次のような一節がある。

……夫より落ぶれ給ふ事を郎当と云也。されば、平人世に落るなどを郎当と云と也。されば、平人世に落るなどと、僻なるべし。

蜀に蒙塵した玄宗皇帝の落魄を説明する一節である。このうち「」で括った部分が重複しているが、この重複が、行を隣合せて現われる。「……を郎当と（云）」という表現に惑わされての誤りに基づくことは、容易に想像されよう。

同様な例として、次のごときもある。44「雪山童故事」は釈迦本生譚の、いわゆる「半偈の句」の本説であるが、その一節に、飢えた虎に餌乞われた雪山童子のことを述べ、

……さらば我身を□□□□。末の二句をきかんとのたまふば、虎大

口をあきて待し所へ身をなげ給ふ。……

とある。このうち、四角にした箇所は、実は、「なげ給ふ」と書いたうえを消し、「あたゑん」と傍書する。この失態は、「身を」という辞句の一致に幻惑され、一行先にある「身をなげ給ふ」に目が行ってしまった結果に外ならない。

また、次のような例もある。

山城のみでの下帯引むすび忘れはつ草の露 定家

(108「為手の下帯事」)

『大和物語』に載る歌、という。『大和物語』に定家の歌が載ること自体いぶかしいが、この歌の下句は、書人に正すごとく、「頼みしかひもなき世也けり」でなければならぬ。かかる不可解な歌が出来あがってしまったのは、

山城のみでの下帯引むすびたのみしかひもなり世なりけり

みちのべのみでの下帯引むすび忘れはつ草の露 定家

(『歌林良材集』)

という上句が類似した二首の併置のしからしめたところ、との推測を可能にする。

以上の三例、いずれも目移りによって原本を写し誤ったもの、あるいは転写を重ねる間に誤ったものであろう。それゆえ、本書は原本ではなく、転写本である。そしてまた、原本の成立は、書写年時をさらにさかのぼることにならう。

次に、前に保留した脱落のことに触れるとしよう。先に書誌を述べる

にあたって、全丁数を一一九丁としたが、より厳密に言えば、途中、半丁前後の余白のある丁が何箇所かある。また本文の記事が中断、中絶している箇所もあり、それをひっくり返して表示すれば、次のごとくである。

第3丁 目次の末尾 半丁余白

第33丁 20「窓聚螢雪故事」の末尾 六行分余白

第48丁 43「龍門滝」の記事の途中以下 中断

第83丁 89「六欲天」の記事の途中で中断

第84丁 92「虎眼勢作石古事」の末尾 三行プラス半丁分余白

第97丁 103「南去雁札北来鯉緘故事」の記事の途中で中断

第98丁 104「柿の葉の文故事」の和歌の途中で中断

第102丁 105「公治長故事」の末尾 六行プラス半丁分余白

最初の例、目次の末にある余白は、本文を奇数ページから始めるための配慮として、納得が行く。が、それ以外の余白または中断は、本文に欠陥のあることを示す徴表とみなすべきであろう。とくに第84丁末の余白は、問題が大きい。それ以外の余白箇所が、いずれも次の丁冒頭に、新しい見出しを備えているところから、一項の末尾だけの欠損で済んでいる可能性が大きいのに対し、第85丁冒頭は、「如此委しるしをきしことを……」と始めていて、しかも前丁に内容が続かない。これは、余白の前だけでなく、後にも欠損のあること、つまり複数の項目がその間に欠けている蓋然性を示唆する。

余白はかかる想像とともに、また別種の推測をも可能にする。第102丁

にある六行プラス半丁分の余白は、ここに大きな断絶のあることを意味している。この余白の以前と以後とは、記述に著しい相違を見てとることが出来るから、である。第一に見出しの表記が違う。いま、この余白をはさんで隣り合う見出し二つずつを、底本のままに掲出してみよう。

百四 一柿の葉の文故事

百五 一公治長故事

百六 浦嶋子の逸事

百七 松浦佐用姫領巾礮山事

104、105の見出しは、「二つ書き」で始まり、「(……)の故事」で終る。

そして、105以前の各項が原則としてこの形式を守り、106以降また、この形式に従わず、一つ書きを欠き、「(……)の事」で終る形式を採って対象的である。第二に、105以前の各項が、原則として、連歌の付合を冒頭に置くことによって始まり、106以降が、和歌を置くことによって始まる、という相違もある。加えて、第三に、これは翻刻のうちにも注記しておいたが、106以降は、巻末に至るまでが、実は、『歌林良材集』下巻第五「有由緒歌」の抜書きなのである。

『古事類』は、前半と『歌林良材集』の抜書きである後半との二つに分れるが、その点が明らかになったことによって、たった一つしかない内題が、「故事本語本説連歌聞書 上」という中途半端なままにあることとの不思議が解消する。『古事類』の前半は、「故事本語本説連歌聞書」上下二巻(あるいは上中下三巻)なのである。原本には、「故事本語本説連歌聞書 下」という内題も、しかるべき箇所にあったが、転写の間

に生じた脱落、すなわち、本書に余白という形を採っている部分に隠れているのだ——と。

既述の「カリフォルニア大学バークレー校旧三井文庫写本目録」は、標題を内題から採ることにしたので、この原則に従って、本書は「故事本語本説連歌聞書」の名で記載されている。だが、ここに述べきいたところからして、

「故事本語本説連歌聞書・〔歌林良材集抜書〕」

と訂正されねばならないもの、ということになる。本稿にあっては、この二編を総合したタイトルとしてふさわしい、外題の「古事類」を採ることにした。本書にあって、「故事」は、また「古事」とも表記される。「古事類」とは、つまり〈故事〉類の謂に外ならない。外題の「古事類」が本書の実体を正しく示していることは、この先おいおい明らかになるであろう。

\*

本書の後半については、すでに述べた『歌林良材集』下巻第五「有由緒歌」の抜書き、という以上のことを言う必要はないものと思われる。むしろ前半の「故事本語本説連歌聞書」のことを、以下に述べることにしたい。

これは、和漢儒仏にわたる成語を見出しに、宗祇、宗長、曉雪(三条西実隆)らの連歌を例句として掲出し、その解釈に即しつつ、本説を説明する。これに類する書に、続々群書類従所収の『連集良材』がある。いま両書、項目の共通するさまを示してみるならば、次のごとくになる。

『故事本語本説連歌聞書』

『連集良材』

- |                |      |               |
|----------------|------|---------------|
| 1 王昭君故事        | 四    | 「王昭君」         |
| 2 卞和が玉         | 一六   | 「卞和ガ璞」        |
| 6 太公望          | 一五   | 「太公望」         |
| 7 燕丹太子故事       | 二〇   | 「烏ノ頭白」        |
| 8 司馬穰直誓故事      | 七一   | 「昇仙橋」         |
| 9 守宮故事         | 四一   | 「守宮」          |
| 10 蘆花絮故事       | 二    | 「蘆穗綿」         |
| 13 傅悦故事        | 八    | 「傅説」          |
| 14 獸炭故事        | 五七   | 「獸炭」          |
| 15 麒麟出現鳳凰來宿の故事 | 三九   | 「麒麟」・四〇「鳳凰」   |
| 16 斧柄朽故事       | 四九   | 「斧ノ柄」         |
| 19 断琴故事        | 二七   | 「絶絃」          |
| 21 文王語         | 四八   | 「苛政」          |
| 34 庭訓          | 四六   | 「庭ノ訓」         |
| 43 龍門滝         | 六六   | 「龍門」          |
| 48 衣裏宝珠        | 五五25 | 「○衣ノ玉トハ……」    |
| 49 飲酒戒         | 五五26 | 「○此歌ハ女房ノ……」   |
| 49' 劫より劫の……    | 五五23 | 「○此歌ハ法華法師品……」 |
| 51 伯母捨山本説      | 五五24 | 「○仏ノ姨母……」     |
| 63 娑婆往来八千度     | 五五27 | 「○思ノ家トハ……」    |
| 86 馬鹿之故事       | 二二   | 「指鹿云馬」        |

103 南去雁札北来鯉緘故事

二五 「蘇武」

『連集良材』の各項に私に通し番号を付けた。その第五十五段は、記事に○を付けただけでの小項目の羅列がある。これに、枝番号を設けた。

両書ともに例句を中心に故事を説明することにおいて共通するうえに、これだけの見出しが一致し、かつ、配列の順序にも何らかの関連があるように見受けられる。例句の一致もけつして少なくない。しかし、項目数の多寡、説明の繁簡などの、おのづからなる相違もまた存し、両者の直接的関連を言うのが躊躇される。その実例を掲げてみよう。2「卞和が玉」に、次の例句を引く。

三たびみがきし玉はから国

これに相当する『連集良材』の例句は、

三たひみさりし玉やからくに(一六「卞和ガ璞」)

である。そして、この句は『新撰菟玖波集』に載るところであるが、横山重・金子金治郎氏『新撰菟玖波集 実隆本』(昭和45 角川書店)によれば、「みかきし」「みさりし」と違える二種の伝本がある、という。

例を替えてみよう。10「蘆花絮故事」に

たのまぬものよ中のいつはり

芦の穂はかさねしきぬのわたならん 心敬

の付合があるが、これに『連集良材』二「蘆穗綿」の

まことに似たる中のいつはり

芦のほはかさねし衣のわたならて 専順

が相当するようである。そしてその出典は心敬の『芝草内連歌合』であ

って、

たのまぬ物よ中のいつはり

あしのほかさねし衣のわたならて

が正しい（横山重氏『心敬作品集』昭47 角川書店）。かように細部にいたる検証を行ってみるとき、両者の関係は簡単に論じられるものでないことが明らかになる。

その説明は今後の課題に残すこととして、臆断を一つ提出してみることにしたい。

翻刻を一旦して明らかのように、本書には、誤字、当て字のたぐいしばしば現われる。それら、もちろん転写に際して生じたものを少なしとしないであろう。44「雪山童故事」に、「寒サ百鳥」なる生きものが現われる。雌雄とも毛がなく、寒気に遭って、明日こそ巢造しようとう鳴きあう、という。これは、寒苦鳥である。「寒サ百鳥」の「サ百」は、「苦」の字を写し誤ったものと、容易に想像されよう（本書は、凡例に断るように、片かな文、平かな文両様を交えるので、翻刻に当っては、便宜平がなにしてある）。

しかし、そのうちには、あるいは、内題に謳うごとく、まさに聞書であったことに因むと思われる誤りも存在するのではないか。86「馬鹿之故事」に、

鹿をさして馬といふ人しありければかもをもをしとおもふ成べし  
の和歌に関連して言われる「ゐるまの鴨と云鳥」は、『拾遺集』の詞書を参照するとき、「くるまのかも（車の釘）」が正しい。単純な誤写であ

ったなら、クルマノカモが、イルマノカモになることはあっても、いるまの鴨「と云鳥」には、なりにくいであろう。

語りの口調に類する記述の存することも、この推測を支えるごとくである。たとえば、

……会盟とて、たがひに隣国の王互に国の境に出合、法を定、約を堅し……（2「下和が玉」）

太子丹の孝行にて、秦始皇帝にとらはれて居けるが、……とてのたまふ。燕丹孝行ふかき人にて……（7「燕丹太子故事」）

傳悦と云所に、歛をもち、つゝみを築者、此絵にすこしもたがはず、黄なるものを頭にかけても少しもたがはず。（12「碑文故事」）

など、重複をいとわぬ冗舌な口調は、話し言葉に特有なものとすることができよう。さらに、

三一乗合すとは、法のうゑにて可尋。（34「庭訓」）

此付句は、枕をこゆると云前句に、菊の流を付給ふこと、児童が古事たるべきよし見及候。其子細は……（33「児童」）

も講義、講釈の場の臨場感を残したものかと思われるし、51「伯母捨山本説」の見出しに添えられた注記の「釈尊伯母七種の恨、別紙に註之」の「別紙」も、聞書の口伝を言うのであろう。

\*

講義、講釈の書留めと考えることによつて、本書に載る本語、本説のたぐいは、いわゆる中世注釈書の説話として、連歌書の枠をのり越え、文芸の諸作との繋がりを持つにいたる。周の穆王八正駒云々（32「周穆

王八正駒」、33「児童」は、天台即位法の名で有名な、中世の諸書が載せる説話であるし、褒似とは褒似国の王が周の幽王を滅ぼさん手だてに、野狐を祈りかえた美女、とする特異な伝承（93「術売故事」）が、『董簾抄』に玉藻前の前身を語る箇所と共通する。そして、56「歎念」にある、

初先大覚禪師座禪なさるゝ御前へ一篇上人打成、一片念仏を申、をどりて出たまうを、目をかけずましますを見て、歌をかけ給玉ふ、

おどりはね（「ね」脱カ）がふをだにもかなはぬにいねふりしてはいかゞ成べき

大覚禪師御返歌に、

おどりはね里穂ひろふ村雀鷺のすみかはいかゞしるべき

という問答が、『鷲林拾葉鈔』巻七に載る、

近代時宗云ハ一返上人云人熊野ニ参リ……而有禪宗来テ一首ノ歌ヲ読、上人へ遣ケルト也。

踊ハネ世ニサハカシキ道ハイサ静ナルコソ実ナリケレ

返歌、

ヲトリハネ世ニ唱タニモカナハヌニネフリシテハ思ヒヨラス

ヤ

の一話と無関係でなく、60「誰話」の

釈迦達磨渠、奴、渠是誰

たそくとたそと問ふどもたそはなし誰そと尋ぬるかれはたそ

く

が、『一休はなし』巻「第十三話」の、

或とき新右衛門誰の話を参じけるに、一休示していはく、

釈迦弥勒は是他の奴、しばらく言へ、他はこれ阿誰。

と問ひ給へば、新右衛門歌を詠みて答へけるは、

誰そといふ言葉の下にあらはれて誰そそ誰そよ誰そは誰なれ

と待りければ、一休これを感じて、此一則にて千七百則を許し給ふ

となり。

という一話と同類であり、あるいはその原型に当るものかなど、推測が次々に広がる。

このように伝承の世界にまで範囲を広げて、本書所収の故事、本語を理解しようとするとき、龍宮の玉の枝を手に入れる一話の主人公を小式部と四条の大納言の二人とし（3「珊瑚樹」）、応神天皇が神功皇后に謀反を起して合戦を仕掛けたりする（49「飲酒戒」）のも、何ら異とするに足らないものに化することになる、であろう。

\*

「故事本語本説連歌聞書」の著者（あるいは講者）について、手がかりになるかと思われる記事がある。そのことについて、一言しておくことにしたい。99「雪中の筭故事」に、

此古事の句、ありまゝに、当世郁がたの連歌に見えし、師資のためにしるしをく。

あはれみのふかきおもひしまかせきて

魚やこほりをおどり出らん

とあり、「当世郁がた」の「郁」に傍書して、「都力」とする。また、7



「燕丹太子故事」にも、

……当世都方より下りたる句に……

とあって、こちらは「都」と、はっきり読むことができる。著者は、どうやら地方連歌壇に身を置いた者であつたらしい。そして、あるいは関東の住人でなかつたか、と思わせる記述も存する。69「一樹陰宿、一河汲流他生縁」に、宗牧を宇都宮に迎えて笠間の大嶺和尚の興行した連歌会に触れるが、この記事において、宇都宮を、宮中とも呼ぶ。宮中とは、宇都宮市内という意味らしいが、これは地域的な限界を持つ呼称だったのではないか。そのあたりは、さらに追求してみるに価するものようである。

## \*

以上に述べきたつたところは、『連集良材』にも、ほぼそのまま当てはまるはずである。それぞれを対比することにより、両書の正しい評価が可能になるであろう。『連集良材』は、誤写、脱落の少なくない本書の本文に補いをつけるであろうし、本書また、項目数の多さと記述の詳細な点において、『連集良材』を補うもの、と期待される。

「故事本語本説連歌聞書」は『連集良材』に似た連歌の故事、本説の解説を内容とする。和歌に関する同類の書として『歌林良材集』のあることは、ここにあらためて言うまでもなからう。本書の後半は、その抜き書きであった。もし、本書が『俳林良材集』（元禄十年跋刊）に類する記事をも収めていたなら、和歌、連歌、俳諧の三幅対を成すことになつたはずであるが、それを欠くのは、時代的に早すぎたから、であろう。

もつて本書成立の時期が推察される。とともに、本書が外題を「古事類」とする所以も納得がいくことになるであろう。

以上『古事類』とくに「故事本語本説連歌聞書」についてのあらあらを述べた。

## 凡例

### 用字について

一、本書は、片かな交じり文、平がな交じり文を交えるが、その用法に基準を見出すことができない。よつて、漢文表記およびそれに類する箇所を除いて、平がな表記に統一した。

一、漢字の異体字を、適宜通行の字体に改めた。

### 見出し・目次について

一、「故事本語本説連歌聞書」は見出しを一つ書きにし、「歌林良材集抜書」は一つ書きにしないが、それをそのままにした。また、両書を通して漢数字の通し番号を冠するが、それを洋数字に代えた。

一、49「飲酒戒」と50「砂為仏塔」との間に、「一、劫より劫のつもり終もなし」と、一つ書きしてあつて通し番号を欠く項がある。他と比べて見出しの状態をなさないが、便宜これを認め、49の番号を与えた。

同様に58「六道輪廻」と59「玉台」との間にある「上載舟下載舟」も番号を落とす。これに58の番号を与えた。

一、68「三歳兒童皆念得」は、行間に見出しを追記するうえに、通し番

号が不適切な場所にある。それを正した。

一、通し番号は、項目の脱落を推測させる箇所への配慮もなく振られて  
いるところから、底本に至ってはじめて付けられたものらしい。見出  
しと番号を一致させる目次も、したがって後補ということになろう。  
一、目次は、「孟三遷」(5)「孟母三遷」(77)「随上」(77)「随上中下各有  
所受」のごとく、心おぼえ風の略記にとどめる。それゆえ、これは  
巻末に図版として掲出することとし、別に本文の見出しに基いて、目  
次を新たに作った。

#### その他

一、句読点、濁点、カギ括弧を私に補い、適宜改行して段落を設けた。  
一、12「碑文故事」の曹娥碑についての記事中、曹娥の父の名「曹肝」  
は「曹肝」、彼女の年齢「二十二年」は「十五年」、黄絹幼婦の記事中  
の「蔡邑」は「蔡邕」が正しいが、この種の注記を省略した。  
一、44「雪山童故事」の「もとのさとりを心にはあん／色にそむ花を一  
ふさわが折て 心敬」の付合の眉上に、「世尊不説ノ説、迦葉不聞ノ  
聞」と書人があるが、これを本文中に移した。

一、91「鶴之駕の古事」に「はしなくていかゞのぼらん天つ雲」の句が  
あり、「はし」の「し」に「ねカ」と傍書する。「羽なくていかゞ上ら  
ん」ならば意味が通りやすいように思われるが、「はし」は、後文か  
らすると、「のぼりはし」すなわち梯子でなければならぬ。また、  
「ねカ」の傍書は別筆で、後人の書人と思われる。このたぐいを省い  
た。

一、100「二女斑竹の故事」に「自<sup>リツカキヤ</sup>司<sup>レ</sup>過<sup>ル</sup>之人」とする箇所を、意によ  
って「自<sup>リツカキヤ</sup>司<sup>レ</sup>過<sup>ル</sup>之人」と改めた。同様にして、返り点の不備、不適  
切等を正した。

一、「歌林良材集拔書」の各見出し下に、括弧を設けて示した数字は、  
『歌林良材集』下巻「有由緒歌」の各項に、私に付けた通し番号であ  
って、その項に基づいていることを意味する。

〔追記〕本書のマイクロ・フィルムが、海外科研の終了の後、国文学研  
究資料館に寄贈され、閲覧に供されていることを、付記する。請求番号  
は〈二二五—五—六〉で、書名は「故事本語本説連歌聞書」になってい  
る。

最後に、カリフォルニア大学バークレー校東亞図書館館長ドナルド・  
シャイプリー教授に、本書翻刻の許可を与えられたことを、調査にあた  
って数々の御高配を賜ったことも併せて、お礼申上げたい。

#### 目次

##### 「故事本語本説連歌聞書」

- |         |          |                 |           |
|---------|----------|-----------------|-----------|
| 1 王昭君故事 | 2 卞和が玉   | 3 珊瑚樹           | 4 李広故事    |
| 5 孟母三遷  | 6 太公望    | 7 燕丹太子故事        | 8 司馬攬直督故事 |
| 9 守宮故事  | 10 蘆花絮故事 | 11 老馬知道故事       | 12 碑文故事   |
| 13 傳説故事 | 14 猷炭故事  | 15 麒麟出現、鳳凰来宿の故事 |           |

- 16 斧柄朽故事 17 二月之瓜故事 18 灯台鬼故事 19 断琴故事 91 鶴の駕の故事 92 虎眼勢作石故事 93 銜壳故事 94 比翼連理故事
- 20 窓聚螢雪故事 21 苛政猛於虎 22 後世可畏 23 順耳 95 羯鼓樓故事 96 鄭公孝行故事 97 陳遺飯盛 98 郭巨孝母故事
- 24 七十に而雖心発不越法 25 山梁の雉子時なる哉 28 敬老如父母 99 雪中の笋故事 100 二女斑竹の故事 101 誹謗木、同諫鼓故事
- 26 三省我身 27 真砂長而成石、小石長而成巖 30 流水不帰 31 文武兩道 32 周穆王八疋駒 102 張翰故事 103 南去雁札、北来鯉緘故事
- 29 会者定離 30 流水不帰 31 文武兩道 32 周穆王八疋駒 104 柿の葉の文故事 105 公治長故事
- 33 慈童 34 庭訓 35 梅婦人故事 36 漁笛漁火
- 37 漢高祖紫雲 38 獸吠雲故事 39 犬守星 40 犬吠見馴事
- 41 仙京 42 漢武帝求仙術玉ふ事 43 龍門滝
- 44 雪山童子故事 45 法薪 46 五行 47 残灯
- 48 衣裏宝珠 49 飲酒戒 49' 劫より劫のつもり終もなし 106 浦嶋子の逸事 107 松浦佐用姫領巾躰山事 108 為手の下帯事
- 50 砂為仏塔 51 伯母捨山本説 52 鶏足山故事 53 趙州庭前柏樹 109 くれはとりの事 110 葛城王賜橘姓事 111 奥州金花山事
- 54 鶏八声 55 勤息観 56 観念 57 二仏中間 112 岩代の結松事 113 三輪しるしの杉事 114 葛城久米路橋事
- 58 六道輪廻 58' 上載舟下載舟 59 玉台 60 誰の話 115 うぐひすの卵中郭公事 116 山鳥の尾の鏡の事 117 鳩ふく秋事
- 61 梁武帝達磨の問答 62 香麝の悟 63 娑婆往来八千度 118 野守の鏡事 119 井もりのしるしの事 120 錦木事
- 64 三車火宅 65 葬送竹祭 66 発心 67 会者定離、愛別離苦 68 三歳兒童皆念得 121 反衣見夢事 122 猿沢の池に身なげたる采女事
- 69 一樹陰宿、一河汲流他生縁 70 好事不如無 71 電光朝露石火 123 しぎのはねがきの事 124 八橋蜘蛛手事 125 末松山事
- 72 梅檀香 73 自立他破 74 止観 75 仏法東漸 126 しのぶもちずりの事 127 宇治橋姫事 128 武隅松事
- 76 回門 77 随上中下各有所受 78 世間不自在 129 野中の清水事 130 篠田社の千枝事
- 79 夜は壁に有耳 80 晩学 81 狐疑心 82 十日之菊 131 小花が本のおもひぐさ事 132 常陸帯事
- 83 蝸牛の争 84 安部仲丸 85 住吉明神白染天 86 馬鹿之故事
- 87 五雨十風 88 巨靈神 89 六欲天 90 列子故事

〔歌林良材集抜書〕

故事本語本説連歌聞書 上(内題)

1、王昭君故事

かゞみのかげにうちなげきつゝ、

ひく琴に我が音やたてんたびの道

をもへばかなしとをく行道

宗祇

引琴に鳴音やそへむ馬の上

此句は、漢の元帝、胡国と攻たゝかひしが、胡地の軍利運を得しほどに、漢より和睦して、美人を一人胡国へ渡すべきよしさだめ、無事をなす。しかるに、漢の元帝三千人后をもちたまふ。その三千人の内いづれの美人をわたさんと定めがたければ、臣下をあつめ、「いづれをか、つかわさん」と御尋ありしに、「三千人のすがたを障子にうつさせられ、其中にをとりたらんを胡地へわたされよ」と大臣公卿申上げれば、毛延寿といひし画師に仰付られて、かゝせられしに、いづれも胡地へわたされんことをかなしみ、黄金の賄賂を毛延寿がかたへ、「我姿をよく書てたまわれ」とて、我をとらじとまひないを送るほどに、何れもをとらぬやうに写す処に、王昭君は鏡を見て、「我ほどの美人は三千人の中にもあらじ」とをもひ、画師の方へ黄金をもをくらず。然間、延寿も昭君が姿をわろく写なす。三千人皆かきうつして後、元帝を始奉大臣月卿雲客、三千人の姿を、「いづれかをとる」とせんぎありしに、昭君のすがたわろしとゑらび出す。元帝かぎりなき御寵

愛なれども、綸言如汗、出でゝかへらざれば不及力、胡地へ渡さるゝとて、あまりに昭君をおぼしめして、道すがらのなぐさみにとて、馬上に琴をあづけたもふ時、「十二絃の琴、馬上にてをもかるべし」とて、三げ二つめて、四絃になしたもふ。それより琵琶のはじめなり。「歌道には、琵琶をも琴とよめること、不苦」と宗祇ししたもふものにもあり。昭君馬上の琴は、必ひはなり。

「四のを」とよめる歌、

涙のみさきだちけりな四の緒の声にひかるゝ駒もかへらず

此歌は昭君馬上の琴を、秋月よみたもふなり。

又、鏡のかげにて、「我身よき」と見しをうらむ心をよめる、

見る度に鏡のかげぞつらき哉かゝらざりせばかゝらましやは

此歌は昭君のよみたるやうなれども、さにはあらず。昭君になりかはりて、鏡をうらむる心をよめり。「かゝらざりせば」とは、かくあり

せずは、かくのごとく胡地へ渡されじ、となり。

あまさかるひなの別のかなしさにきつなき玉の身をぞうらむる

是も身のうらみをよめり。「きすなき玉」とは、我姿の見よかりしを

うらむる、となり。

あらずのみ成行旅の別路に手なれし琴の音こそかはらね

道すがらなくさむやとて引琴の緒ごとに玉をぬく涙かな

昭君弘玉鞍 馬上啼紅頰 今日漢宮人 明朝胡地妾

此詩も前の二首の歌の心也。

馬上彈琴啼

此句も昭君の事也。

かへる世もなきもろこしの旅

霜の後夢も千里の外なれや

宗祇

此付句は昭君胡国に渡りて後、漢宮を恋し心を作詩にて、したてたもふ也。

胡角一声霜後夢 漢宮万里月前腸

此詩にて前の付句聞也。

あだびとの千々のひとつもひろまめや

こがねもとめて絵がくおもかけ

此付句も昭君の古事也。

生乏黄金柱画図 死埋青塚人教人嗟

此詩も昭君の事を作。

能遣明妃嫁夷狄 画工元是漢忠臣

此画工は毛延寿事也。

昭君若贈黄金路 定是終身奉帝王

見るまゝの我姿をやかきてまし千々の金をおしまざりせば

此詩歌同心也。世間の義、みだのみにて、油断不可叶。同欲心是又取捨べし。

蒙求に「昭君村柳」と云事あり。漢元帝被召出申時、昭君与母誓云、「我君愛あらば、此柳栄べし。無君愛可枯」云て、七本柳植置、胡国へ渡さるゝ時、かるゝと也。

## 2一、下和が玉

三たびみがきし玉はから国

佗つゝもあればかしこき世にあひて

智温

治りし時をえてこそ玉ならめをろか成世になど生れけん

此歌連歌の古事は、楚国のかたはらの山中に、下和と云もの、畑を打とてあら玉を見つけて、「是をみがきたれば、すぐれたる玉なるべし」とて、持て折節を窺けるに、或時楚の勳王の、御狩にて彼山中を御通り之時、下和此石を帝に奉て、「是は世に類なき玉にて候べし。みがせられ御覧あれ」とて、捧申。勳王悦て則玉人を召て磨せらるゝ。光更に出ざりければ、勳王大にいかりて、「朕を欺事、罪なり」とて、下和が左の足を切、彼石を負せて返したまふ。下和罪無して此刑法にあひけるを、あさましくをもひ年月を送、徒居けるに、其後三年ありて勳王崩御なれば、御子の文王の御代になりて、文王も又御狩に御出ありて、彼下和が住居する山中御通り之時、下和亦彼の文王へ捧、「先帝御覧しられざること口惜」と申、「能々磨せられれば、無双の玉なるべし」とて奉。文王も御悦ありて、玉人をめして磨せられるに、是も「石なり」とて、「下和偽にくし」とて、亦右の足をきられて、弥啼悲、我身上をばさしをき、二代の帝をろかにてましますことを明暮歎かなしみ、血の涙をながし、廿余年を経るに、文王崩御ありて武王の御代になり、亦武王狩して彼山中を御通りありける。なをもこりず、下和草庵よりはひ出て、二代の帝に両足を罪なくして斬申故を語、此石を武王に奉る。武王も能御覧知らせ給ひて、玉人を召て琢磨させ

られければ、其光天地に映徹て、無双の玉也。是を行路に懸ければ、車十七両を照しければ、「照車璧」と是を名付く。宮殿に懸之ば、十二街を耀せば、「夜光璧」とも号す。誠の天上の摩尼珠、海底の珊瑚も、是にはすぎじと見ふし。

此璧、代々天子の御宝となりて、後は趙王是を重じて、「趙璧」と号す。学の窓に螢雪を聚ねども書を照し、釐路に月を待ねども路を分つ。

亦此玉を「連城璧」とも云。其故は、秦國の王、此璧を伝へ聞て、「いかにもして奪とらばや」とをばしめし、異國の法には、会盟とて、たがひに隣國の王互に國の境に出合、法を定、約を堅し、交を結。酒宴終日に及、酒酌して秦王盃を挙給ふ。秦の兵ども酔狂の躰にて座席へすゝみ出、目を瞠かして、臂をはり、「我が君興に和して盃を傾けむとす。趙王琴をしらべて歌をなし給へ」と云て、趙王辞せば殺さんとみへし。趙王力なく、瑟をしらべ、謳給ふ。王の傍には、必ず左史右史あつて、王の御振舞を註とゞむ人あり。秦の左史筆を取、「秦趙兩國の会盟に先、酒宴あり。秦王盃を挙げたまふ時、趙王自謡をなし、瑟をしらべたまふ」と書付る。趙王、後記に留ぬる事を、心うしと思召せども力なし。盃めぐり、趙王盃をうけたまふ時に、趙の臣下に藺相如と云し者、秦王の前にすゝみ出て、劍を取はしり、臂をいからかして、「我王已に秦王のために瑟をしらぶ。秦王なんぞ我王のために謡をなさざる。秦王もし此事を辞たまはら、臣必王の座に死べし」と申。秦王辞する詞なければ、自起て歌をなし、舞たまふ時に、趙の左

史進出て、年月日たしかに、「秦趙兩國会盟あり。趙王盃挙げたまふに、秦王自酌を取、謡舞たまふ」と委細に記録し、恥を雪。角て秦王趙王に向て宣玉ふ、「卞和が夜光の璧、世に類なし。ねがはくは、此玉を給て秦の十五城を玉の代に獻ぜん」とのたまふ。「若此玉をたまはらずは、会盟忽やぶれ、永胡越のへだてをなすべし」とぞをどされける。趙王思召は、「璧ををしみ、たとへ十五城にかへずとも、今の勢にては、奪取れべし。心ならず十五城にかへむ」と領掌して、趙璧を秦王へ出されける。其後より世に「連城璧」とも云へり。

趙璧元無瑕類 相如シゲリニ 誑アソク秦王

此語の心は、趙王の臣下に藺相如と云者、趙王の御前に出、奏て云、「玉に十五城を替んと約ありて、城をも渡さず、璧をも返したまはらず。無念なれば、願は、王臣に許し給はら、我秦の都に向、彼玉を取返し、君に奉べし」と申す。趙王「さることやあるべき。秦は國にし、兵も多し。我國は小國、兵少し。力及がたし。」藺相如かさねて申云、「力にて璧を奪べきにあらず。秦王を欺て取返すべし。唯御許容を蒙、まかり向べし」と申ければ、「汝が意に任す」とて、許さる程に、相如兵の老人もめし具せず、劍戟をも帶せず、衣冠たゞしくして車に乗、專使の威儀をとゝのへ、秦の都へ參、官門ツツに入て礼儀をなし、趙王の使藺相如、直に秦すべき事ありて參内のよし、を申す。秦王も南殿に御出ありて、座したもふ。則調したまふ。藺相如畏て申けるは、「先年君王へ獻ぜし夜光の玉に、かくれたるぎずのすこし候を、かくともしらせまいらせず獻しこと、一の越度なり。凡玉の瑕をしらで置ぬれ

ば、主の宝にならぬ事にて候。此璧のきつづを、ひそかに君に知せ申さん」と奏す。秦王悦て、彼璧を蘭相如にみせらる。相如此玉を請取、劍を抜て樓閣の柱にあて、「夫君子言約を、十五城をも渡されず、玉をもかへされず。君兎角の儀あらば、打碎、秦の都にて自害して、血を宮殿に洒かけん」と。其時理にまけて璧を相如に奪れたまふ。此心にて、相如盜に秦王を誑と也。

ゆふへの道にまよふ小車

夜光玉を何国にもとめまし

行動

「夜光の玉」と云は、珠、称夜光。史記に、随侯祝元暢之齊道見一蛇一將死。以水洒摩傳神藥而去。一夜中庭有光謂賊。案劍視之一蛇脚珠在地。前蛇之感報也。能照夜。故曰夜光珠、と云。依「此車」と云前句に、「夜る光玉」と付候へば、下和が照車壁にて、付句は亦夜光の珠にてしたたると聞ゆ。

下和が玉は、多の名あり。照車壁、趙璧、車城壁、夜光玉とも云へり。珠玉のふたつのかはり、山より出るを玉と云、海より出るを珠と意得べし。干珠満珠、龍女が仏に捧し如意宝珠亦は無価宝珠とも、いづれも海よりの玉なり。又昆山片山とて、下和が玉の出所也。

下和有知楚嫌

### 3一、珊瑚樹

あら玉の枝おりえたる今年哉

心敬

我いつはりのほどをあはれめ

袖のなみだのたまの枝おりて

兼載

此前句、「わがいつはりのほどをあわれめ」と云所大切なるを、故事にて、ふしぎに付なしたまふ、と也。此歌にて聞ゆ。

誠かとりてみればことのはのかざれる玉の枝にてぞありける此歌は、四条の大納言、小式部の内侍に心をかけてさま／＼にいひやりたまへども、心とけず。あふまじき難題に、「をとに聞をよびし龍の宮こに、玉のなる木ありと聞。此枝をみせたまはどあはん」といへり。さるほどに大納言、いかやうにもいつはりてもあはんとおもひ、玉すりにあつらへ、龍宮のさんごのゑだのごとく玉をすらせ、小式部の内侍方へつかはさる。小式部、此上はせひにおよばずと思ひ処に、玉すり、「玉のかほりを給れ」とこひしを、その時よめる歌なり。しかればこの付句、「我いつはりのほどをあはれめ」と云処、四条の大納言いかにもしてあはんと思ひ、いつはりの玉をすらせたまふをあはれめ、となり。

### 4一、李広故事 念力石をとすと云

いることかたきまことある道

虎ならぬ石に箭を取弓ひきて

專順

將軍射殺南山虎 子細看来是石頭

此の詩の心は、李広將軍母を虎にとられて無念に思ひ、いかにもして此虎に尋あひ、射ころして、親の敵をとらむと親、ある国ある山中にて虎のふしてをるをみつめて、弓に矢を打つがひ、よつ引てはなつ。

此箭筈をせめて、虎にたつ。虎すこしもうごかず。扱は射殺たりと思ひて、ちかくよりてあれば、虎に似る大石なり。其時、李広さても是れほどもとがりたりと、我ながら不思議とをもひ、かたての箭をつかひ、石虎に向てよつ引放に、こんどは少もたゞず、はねかへる。然ば念力にてとをる者也。

虎と見て射矢は石にたつものをなど我恋のとをらざるらん

此歌のごとく、何事も我存分ほど成就するもの也。うはつらにては諸事不可叶。

又故事などを能々無分別して仕候得者、後見はつかしきものなり。

ある人の句に、

石にたつ矢のみゆるさかもと

大ひらや都のとらにあたるらん

此付句、あいごんは、みやこの寅の方にあたると云句か。前句、「石にたつ矢」とはたとある句に、「虎にあたる」と付こと、まことに古事の分別なきこと也。うはつらばかりの事也。「虎にたつ矢」などはあらん句に、石を了簡は、面白かるべし、と也。

## 5一、孟母三遷

山がつと心もならばいかゞせん

あやしきとなりあらためてすめ 兼載

たらちねのさらに隣をかへけるも子を思ふ道と聞ぞかなしき

此故事は、孟子幼稚の時、隣にかわつくりあるに、孟子隣のかはつく

りの、皮はりこしらへするをみて、木葉を以、かわはるまねなどをしてあそびけるをみて、あしき隣とをもひ、其所を住かへ、他所にうつり住しに、今の隣にも箕作りあり。孟子みをつくるを見て、又あそびに篠などにて、箕を作まねをせしを、孟母是をみて、三度めには勸學院の門前へ移居ければ、孟子鼻紙などを物本になして、書をよむまねをせしほどに、をのづから学道になる、と也。是を「孟母が三遷」と云也。「あやしき」とは、いやしき也。あやししの賤など、云心也。箕婁賤業を云事是也。

又、「孟母が断機」と云事、孟子母に逢、学文を懈怠して家に来りけるを、母の、返事をしければ母学文をろかなるゆへに、親の返事をなしけるとて、いまだ織かけたる機をたつとての詞に、「汝が学、此機を如断」とて、たちすてし、と也。是折檻の詞也。

いさめのことばうつにまされる

はたものを織中たゞし世のためし

古句

此付句、断機の心か、尋ぬべし。

又、或物本に有けるは、猪をころすを見て、孟子母に向て問云、「猪を殺、なんの用ぞや。」母とりあへず、親子の戯に、「汝にくはせん為に殺すぞ」と云て、やがて悔て、「くわせずは兎にいつわりをしらすこと、口惜」とをもひ、其猪の肉を買もとめて、くわせし、と也。其心は、かりそめにも偽をならはせじ、との心也。

## 6一、太公望



みつのかしはのうらはかひなし

いせの海の釣はかしこき人ならで

心敬

車の右にのりしかへるさ

人のみる馬場のひをり時過て

宗尙

此両句、まへは「かしはのうら」と云に、史編が占なひに付なし、前句「うらのかひなし」と云。「伊せの海の釣はかしこき人ならで」とは、涓浜にて太公望直釣を垂しを、文王得物にして、車の右に乗て帰り給へば、かひある事也。末の句は、周の文王御狩出たまはんとて、ものいみすること三日とて、さて史編にうらなはせて、「博士の占にしたがはむ」と尋たまふ。史編が詞に云、「非魂虎に、天下の重宝を得給む」と占申。文王悦て、御狩出玉ふ。

太公望避<sup>レ</sup>殷<sup>ノ</sup>徑<sup>ニ</sup>水<sup>ニ</sup>釣<sup>ニ</sup>渭<sup>ニ</sup>水<sup>ニ</sup>、待<sup>ニ</sup>賢<sup>王</sup>世<sup>ニ</sup>抛<sup>ニ</sup>直<sup>ニ</sup>釣<sup>ニ</sup>、作<sup>ニ</sup>此<sup>ニ</sup>言<sup>ニ</sup>。

聖人出時ならば魚を釣得とて、七十余年釣す。或時大鱸<sup>すま</sup>を釣る。彼魚の腹の中に「姫命受辞」之文あり。姫は文王の性也。太公望不思議に憶て居る時、文王狩に出、会太公望、「直の釣を以ては何の為ぞや」と問玉ふ。「負命釣魚」答。其時、史編が占し得物は是ぞと思、車の右に乗て帰り玉ふ、と也。

魚腹の玉をよめる歌、

釣の糸により来る波のしら玉やかゝる所の名に残らん

直釣をよめる歌、

浮世をばはなれ小島のいたれどもはりなき釣にかゝる玉のを

此「はりなき」とは、鉤なきこと也。直釣也。是も「釣にかゝる玉の

を」とは、魚腹の玉の心もこもれり、可尋。

まがらぬこそはみちの道なれ

世のためしかしこき人の釣たれて

賢盛

此前句、「まがらぬ」と云所を、かしこき人の釣直釣垂と云ことを付なせり。

四方の海昔に帰波の上に浜人いまや御狩まつらん

是も太公望故事也。

「七夕熊」と云題にて、

狩衣熊にもあらで天つ星今夜にあふや得物成らむ

史編が占の如く四熊にあらず、衣をしくひまもあらぬ、と兼たり。

又、左盃といへること、太公望に文王酒をすゝめ玉ふ時に、右の手には釣竿を持、左の手にて酒を請しより初る。左の手計にて請ること、不苦。人の請るとも緩怠とをもふべからず。我はさうけべからず。呂牙、尚父、太公望 呂望とも云、一人の名也。周文王、武王二代の師と成て、殷紂を亡し、周の代となす也。周公旦も太望を師として九聖人之中也。武王早世にて、成王年幼して襁褓の中の踐祚、周公旦代成位、移天子位、南面にして朝諸侯於明堂。七年して成王、大しての反其位、周公旦飯<sup>レ</sup>臣<sup>ニ</sup>位<sup>ニ</sup>也。

7一、燕丹太子故事

我かへるさき道もをぼへず

やまがらすかしらも白く降雪に

宗牧

此付句、燕丹太子は、鳥のかしらの白く成を吉事にて、本国へ皈りしが、「我帰べき道もをほへず」と云所を、念を入れて付なせり。からずさへ白くなてて古郷へ帰し本語をふまへ、是ぞ故事のとりあつかひの、てほんなるべしや。当世都方より下りたる句に、

うをやこほりを、りいづらん

と王祥故事を其ま、心も詞も不替、たゞしいかんく。

山鳥頭も白く成にけり我帰るべき時や知るらん

此歌は、康頼薩摩瀧にて、嶋に熊野三所を安置申、日参して帰洛を祈して、頭の白鳥をみて、帰洛嘉瑞と悦よめる歌也。太子丹の孝行にて、秦始皇帝にとらはれて居けるが、古郷に老人の老母有り。床鋪とて、「暫時の晦を請、老母に逢はん」と云。始皇彼を返さじとて、「汝をかへさんことは、鳥の頭白くなり、駒に角生たらん時返べき」とてのたまふ。燕丹孝行ふかき人にて、天道に祈、「鳥の頭しろくなし、駒に角をうやして、我を本国へ返し、母にあわせたまはれ」といのる。天道に叶けるや、駒に角生たるを「稀なることなり」とて、内裏上覧にそなへける。又其折節禁中の籬に、頭白き鳥来り居る。綸言出でかへらねば、せひに不及、本国へ返し給。是を以て康頼もよろこびて、「我帰るべき時や知るらん」よめり。

秦皇驚歎燕丹之去日鳥頭

是も太子丹之事也。

身ははし柱くちもはて、よ

おもふこと書付てだにかひもなし

聰雪

此付句、穰直は、「我駟馬の車に乗ずは、此橋を二たびかへらじ」とちかひを書付て、願成就して翰林学士の位になりて、馬四疋に車をかけて、橋を帰りし、となり。さて、此前句「身は橋柱くちもはて、よ」は、長柄の橋柱の心にもあるべきを、付句の心は、穰直はかきつけしことのかひあり、我は思ふことを書付てもかひなきほどに、橋柱くちはてよ、と付なせり。

ふた、びはあはじとゆくも帰来て

橋柱にもちかひたて、き

聰雪

このまへく、恋などにて、たがひに浦みて、二たび参間敷など、いへも、跡もなく帰来ること、ならひなり。付句のとりなしは、我四馬の車にのらずは此橋を二たびかへらじ、と替しを付なせり。

さて、此橋は、蜀の国の北に七里ある橋也。名をば昇仙橋と云橋也。此柱に、「学不成就ならば二度古郷へ帰まじき」と云心也。学文成就して翰林学士の位になれば、駟馬車に乗る也。如此入学に志なば、不成就の義あるべからず、と云様也。

九龍の車、七熊と云あり。九龍車は、天子のめす車也。龍を九疋車に画を云。七熊の才芸とて、芸智慧のたけたる人乗車に、熊を七疋画と也。四馬車の心也。

唐人柏山語る、西川と云国へ、他国の者来宿すれば、頭は人にてど  
うは蛇の成が来りて人いねいれは喰也。其用心に守宮を筒に入、枕  
にさすればくらはれずとなり

いで入ひとのしげき宮もり

うき中や虫のしるしもかはるらむ

賢盛

わするなよ手ぶさにつけし虫の色はあせなば人にいかどこたへん

返歌

あせぬ共我ぬりかへむもろこしの守宮もまぼるかぎりありけり

此返歌の心は、男女の兼約も三年をかぎりに待と云事定と也。はてしなくは、待申間敷、と也。「あせず」とは、印の血のをちたること也。

抑いもりのしるしのこととは、漢武帝始て、宮女たちの臂に守宮の印と云を初め給ふ。其子細は、いもりの生血をとりて、丹朱に合、女房の右の臂にぬりたまふに、嫁せざるほどはいくかもをちらず、嫁すれば則消うせぬ、となり。さるほどに、いもりのしるしと云へり。歌などには「虫の色」とよめりけるも、守宮のしるしの事也。「虫のしるし」とも同事也。

臂上守宮何日消滅 鹿葱花落涙如雨

此詩も守宮の印之事也。鹿葱花とは宜男草也。

ぬぐくつのかさなることのかさならばいもりのしるしいまはあら

じな

此歌の心、無性なる女のはく物は、必ふみぬぐ所にて、左のはきたる物のうへに右のはき物かさなる、といへり。さやうに度々重ならば、いもりのしるしはみるによばず、消ぬべし、とよめり。

## 10一、蘆花絮故事

たのまぬものよ中のいつはり

蘆の穂はかさねしきぬのわたならん

心敬

中はへだつるうらみやはなき

かさねこもあしの穂わたのあさ衣

宗長

此兩句、関子騫継母の所行にて、我子式人には、しきの綿をきせ、関子騫には蘆穂絮をきせしを、父はしらず。或時父馬にて他所へ行んとて馬に乗時、子騫鐙を押へけるが、手こぶへて鐙ををさへ兼しを見て、如何なることぞと憶ひ、洗濯する時に、父目をとめて見ければ、継母子騫が衣に蘆花絮を入、当腹式人には式の綿をきせしを見て、父大に怒、すでに母をさらんと云。其時関子騫が言に、「母に有一子の寒、母去て三子単」と云て父を諫言する。是を聞召、孔子弟子になされ、三千人其中耨者七十士、又七十士中を十哲すぐり、其二番めの御弟子也。其十哲之次第、

顔淵、関子騫、冉伯牛、宰我、仲弓、子貢、冉有、季路、子游、

子夏

## 11一、老馬知道故事

かへるをしるや馬にまかする

ふる道もおもひいづやとしのばれて

曉雪

道をししるにまかせてをゆく

片岡に老たる馬の駒つれて

宗砌

老馬道をしると云事、韓子に、齊桓公孤竹春往之。還迷惑失道。管

おのろ右ノキ物子もつとソリサウミあくをすうハ

イモリノシルハミルヲヨハス消又シトヨソリ

一 蓮花策故友

たのまわりのしハスソソソソ

まごの徳はまごのまごのまごのまごのまごの徳

中ハ巻ノミソウラミヤハナキ

わさうごしついの徳わりの徳を 寄長

いよあう別子寒き誰かノ取のミテ我子或ハヒキ

綿ツキセ関子譽ハハ蘆穂如絮ヲキセシラハハヒラス

或時父馬テ他取行ヒトテ馬ニ乘時子寒鐘ヲ押

ケルカキフヘテ鐘ヲラサハ節シラ見テ知何ナルコト憶

沈懼タル時ニ父同ヲトメテ見ケレハ誰母子感リカ衆

花絮ヲ入當飯或人ニ或ノ綿ヲキセシラ見テ父大ニ怒ル

ニ母ヲサラシト云其時関子寒リカ言母有子ノ寒母

云テ三子單ト云テ父ヲ諫言是ノ関子ハ子ヲサレ

ニ子今中釋者七ナ士又七ナ中ヲサ折スクリキ番

ノノオ子ハ其ヲ哲之次

顔関子譽再俾寒我伴子貞再有参路子游

中曰、老馬之智可用。乃放老馬而随之、遂得道。是、老馬知、道と云也。

夕されば道も見えねど古郷はもとこそ駒にまかせてぞゆく

此「もとこそ駒」とは、老馬の事也。「本とこそ」とは、「こそ」と云

心也。さしすせその五音也、又駒と云は、世話には若き馬の事、歌道

には馬の事までなり、と得心べし。

12一、碑文故事 金版

くちせぬ名こそをしめにしあし

いし文に昔のことのあらはれて

賢盛

此付句、会稽山の碑文度尚造之。其謂を尋に壁詞疏云、漢ノ乱ノ時、

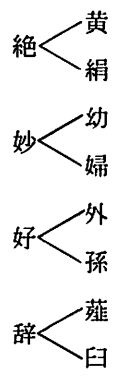
会稽人曹肝能、撫節安歌、渡浙江、溺水死。曹肝女曹娥二十二年肝屍求

ント尋不求得。身ヲ投浙江死。終宿抱父屍。是会稽山上虞山葬

也。是前代ニモ不聞、後代ニモ知ラセント度尚碑文彫記之銘碑文置之。

或時漢ノ義則蔡邕夜至碑文処、火求無。以手摸之読之歎其能ヒ文乃鐫

碑背作八字曰、此碑文嘆徳詞也。



此八字に付て、「有智無知三十里を隔」と云事、曹操と楊哲二人、

此八字の心を案するに、楊哲は忽に悟。曹操が云、「哲は悟や」と問。

「尔也」答。曹が云、「汝語事なかれ。我も案じて読べし」とて、三

十里行間に案じて悟。其時「有智無智三十里を隔」と歎言也。

みちのくのいわでしのぶはえぞしらぬ書尽てよつぼの石文

此歌は、昔黒の將軍へぞを攻つめしとき、向後日本の大とまかりならんと誓をなさせて、奥州信夫の郡つぼと云在所に碑文をしるし立置。其銘に云、

異国の杖は日本の大

如此立をきけると也。歌の心をば聞得とも、大方えぞは正直にて、日本人の謀をもしらぬ、と云心也。

又、唐の太宗皇帝義仲にをくれて、悲のあまり、自碑文をかきて廟に立たもふ。其碑文云、

昔、殷宗、夢中得良弼、今朕醒后失賢臣。

「夢中得良弼」とは、黄頭即来我師となると夢にみて、自夢みし形を画て、官人をもつて、「此絵に似たらん者を尋て、召具てまいれ」とてつかはされしに、傳悦と云所に、鍬をもち、つゝみを築者、此絵にすこしもたがはず、黄なるものを頭にかけしも少もたがはず。しかれば、めしつれて參、そのまゝ在所を名として、傳悦と号。宗王詔曰、「天大旱、以汝為霖雨」。艦船、以汝為舟楫。作和羹、以汝為塩梅」とて万事任せたまふ、と也。

### 13 一、傳悦故事

連歌云、

ゑにかくのみかもろこしの入

誰もたゞをもへば夢のかたちにて

此付句、前の「夢中に良弼を得る」と云所のこと書にて、前句付所は、ふゑつが事也。一句は、人間は誰もはかなく、夢のかたちなりと覚悟して、妄心をはらすべし。

夢にみし人をうつゝにえてしより世もすなをに早成にけり

殷の宗王瑞夢をよめる歌也。

### 14 一、猷炭故事

けだものゝ雪にふしたる跡見へて

兼載

はい白妙に炭ぞのこれる

けぶりぞのぼるをくの炭がま 賢盛

けだものゝかけり雲井はとをきよに

此両句、ともに猷炭と云ことを付なせり。けだものにすみと付、炭鎌と云にけだものを付ることは、猷炭とて、炭をこまかくだきて、粘てこねて、獅子、麒麟、龍、象などの形を作て、金銀にだみて、座席のかざりにして、火を置也。かくのごとくなしても、炭しろたへになれば、けだものゝ雪に刻たる跡の如く成る、と付たまふ也。詩にも角作れり。

莫笑地炉燒、椽狭、富家猷炭他、成灰

富家の猷炭も貧家の椽狭も、灰となることは同こと也。勝るをうらやまざれ、劣をいやしまざれ、と云心也。

15 一、麒麟出現、鳳凰來宿の故事

獸も君がこのときいでつべし

名も木たかしや桐にすむ鳥

宗尙

麒麟も鳳凰も賢王聖人の御世ならでは出ぬと也。麒麟は堯の御代一度出現すると云へり説あり。其後孔子の時出しを、時代無道にて、打殺と云説あり。鳳凰は、周成王の御宇に、庭上へ舞來る、と也。其心の句に云、

我がわう君もこたふこの時

むらさきの庭に舞來る鳥の聲

周成王の時鳳凰來儀紫庭、王歌曰、

鳳凰翔兮舞紫庭

格物論、鳳瑞心鳥也。太平之世則見。其為形也、鷄頭、蛇頸、燕頰、龜背、魚尾、五彩色アリ。高□八許、雄曰鳳、雌曰凰。非梧桐不棲、非竹實不食、非醴泉不飲。凡所棲止、衆禽隨之而集。故曰羽虫三百有六十而鳳凰為之長。然象鳳有五。多赤者鳳、多青者鸞、多黃者鸞、多紫者鸞、多白者鶴。

又云、鳳は七徳そなはる。

上載徳、揚義、背負仁、翼挾信、心抱忠、足履正、尾繫武

是七徳也。

麒麟出現之事。格物論云、麒麟鬣身、馬足、牛尾、黄色口蹄、一角端有肉。高一丈二尺、合仁、抱義、行步中規、折旋中矩、音中鐘呂、游必扱土、翔而後処、不履生虫、不折生草、不群居、不梵行、不犯陷

筭、不羅網網中、国有聖人、則至。麟鳳五靈王者之嘉瑞、而麟為之首。牝曰麒麟、牡曰麟。

16 一、斧柄朽故事

かつみながらもあくごありやは

斧のえもおもふが中に朽つべし

聰雪

あくごもなきやころなるべき

斧のえもかすくちんに契にて

宗長

此兩句、前句の「あく期」を基にとりなして、斧の柄のくちしことを付なせり。其故は、晋王質と云者、山へ薪取に登し時、山中に碁を打者あり。立寄て見て一盤過し時、そばにをきし斧の柄くちければ、をどろき、家にかへり見れば、親類知音の者一人もなし。過來しことを人にとえは、「王質と云人は、七百年以前薪とりに山へ登り、二度帰ぬと聞伝し」と云語。其時、「さては碁一盤見る内に七百年過よ」と驚と也。斧の柄くつるもことわりとをもへり。

不覺腰間斧柄爛

詩にも如此。又、

逢着仙人莫見碁

如此も作れり。

古郷はみしにもあかず斧の柄のくちし所ぞ恋しかりけり

17一、二月之瓜故事

はやきさらぎのなかばにぞ成る

露けぶる園のこりづる花咲て

此付句、古事のとりなしきどくのよし、先達物語あり。二月の半に成ると云をとがめて、二月中旬の瓜の古事、今おもひより給へども、さすはぢきにうりのなりたるやうには我朝には有るべからず。露かすむうりは、花の咲たるごとくと、一句をつくり、前句による所は、「二月中旬已進瓜」と云句をふまえたもふ、と也。

内園分得温湯水 二月中旬已進瓜

此詩の心は、秦始皇の内裏昭陽舎のほとりの園に、二月中旬に瓜のなりたるを、始皇帝へ献ぜしと云事あり。物別温泉のほとり、冬草も枯ぬ、と詩にもみゑたり。

温泉流処冬草青 秋月開

冬ながらまだうらがれぬさいたづまこほらぬ水のぬるぎあたりは「さいたづま」とは、千草の惣名也。

18一、灯台鬼故事

をやにかはるやすがたなるらん

灯のあかき色なる鬼すみて

兼載

此故事は、昔軽大臣と云人、入唐せしに、支那人此大臣をとらへ、ものいわぬ葉を吞せ、をなじくあかく成る葉をかけ、其俣の灯台になし、灯台鬼と号。其子の弼宰相、父の行へを尋て支那へ往けるに、彼灯台

鬼、弼宰相をみて涙をながし、指をくひきりて、血にて詩をかきてみする。其詩に、

我元日本華京客 汝是一家同姓人 為子爺前世契 隔山

隔海恋情辛

此詩を弼宰相みて、さては我が爺なるとしり、さて宰相詩を作、

経季流淚蓬蒿宿 逐日馳思蘭菊親 形破他郷作灯鬼 争飯

旧里宰斯身

其後はゆるされて、父子共に日本へ帰りし也。

おやにをくれし道ぞ淋しき

涙のみもろこし遠き船の中

心敬

此付句に、軽大臣もろこしにとらはれたるを、其子の弼宰相尋ゆきしことを付給ふ。

ひとは見えすまよふ成けり

おやとこわ詩のことはにあらはれて

此付句も、「人と見はかすまよふ」と云所を、灯台鬼にとりなし、ものいはぬ葉を飲、ゆびの血に而詩を書、子の宰相にみせけるとき、をやとしりたることを付なせり。

19一、断琴故事

ことのをたちし人はかへらず

山の奥ながるゝ水もあるものを

宗祇

此まへ句に断琴の心あらはにみへたるを、祇公誰にて音を賞せし所

にて、流るゝ水はいまもありながら、子期伯牙は古人なればかゝらず也。

高山流水深々意 是不子期誰賞音

此心は、伯牙琴の上手にて、高山深水の曲をひきけるを、子期其曲を能聞、請感音を。さて有為無常の習にて、鐘子期死。伯牙、「此後琴ひきても無詮、我琴聞しる者なし」とて、緒をたちすて、琴をわりすてし、となり。

子期去後伯牙裁 絃

緒をたちし琴をやこゝろ郭公

肖柏

此御発句の心は、時鳥どの鳴ぬは、伯牙が、とても聞知る者のなきとて、緒をたちしごとく啼ぬか、との御作なるべし。

呂氏春秋、伯牙鼓琴志在泰山。鐘子期曰、巍巍乎水曰蕩々乎。子期死伯牙絃斷琴破、終身不復鼓之。

知る人なくてすめる古郷

緒をもはやたゝばや老のひとりごと

宗祇

此前句、「しる人なくて」と云所を、琴の曲を聞知る人なしとて緒をたちしを、老の出懐の独言を琴にいひかけて、はやよきころなれば命の緒をもたゝばや、と也。

## 20 一、窓聚螢雪故事

みちあらはれて雪は消けり

ともし火や文に光を残すらん

此句は、映雪の故事也。孫康勤学の上、今世にて名を残しけるは、雪を灯になせしにより、道あらはれたる、と也。

玉札をとばかりだにも絶にけり

あつむるまでの窓の雪かは

宗碩

孫康文道の映雪なるに、今末世に学道には心も不入、忍玉札など雪の窓にて見れば、文道は絶し、と也。文には螢雪の窓尤しかるべし。玉札には分別あるべき、と也。

古郷はおもはぬむしのやどりにて

ほたるあつめし窓のさゝかに

宗長

〈この間六行分余白〉

## 21 一、文王語

世をかへり見るこゝろはづかし

虎の臥山のをくにもすまひして

心敬

はげしき心とらはものかわ

聞もこしきもからき世のまつりごと

專順

しらぬ心はもろこしの人

虎のすむ山より世やはつらからん

宗祇

此心は、周の文王狩したまい、ある山中を通給ひしに、女老人鳴かなしみ居けり。「汝なにとて鳴ぞ」と問給へば、「我が父虎に取らる。妻虎にとらる。今又我子虎にとらる」と云。其時文王、「なんぞ立さら



ぬ」との給へば、其御返答に、「此山に苛政なし」と申。其時文王言に、

苛政猛於虎

「苛政」とは、租税の事、十之一而税也とて、年貢は公界へ十のものをひとつたて、九は妻子眷属をはぐくみ、食衣ためにす。租税とは、ねんぐの事也。

22 一、孔子語

えがたきみちもなをやまなばん

末の世の人とておもひくたすなよ

專順

「後世可恐」と云語あり。此心は、代々賢聖の智慧才学を以、書費を集置給ふことを利根の者学ばず、末世には何たる智慧の者いでなんとて、孔子も未来をのべたまう詞也。

23 一、順耳

聞にむそぢぞとをくへだゝる

かしこしな耳にしたがふそのおしへ

心敬

「六十而順耳」と孔子の語あり。然る間、六十を「順耳」と云也。

老てはひとの身をやすくせん

こへじとの法もくるしきみちにて

宗長

24 一、七十に而雖心発不越法

花鳥も時なるかなや桜がり

宗砌

25 一、山梁の雉子時なる哉

みよしの、山うつばりの鳴なへに今年も春の立をこそしれ

かれのうづむ雪に心をしかすればあたりののべに雉子鳴也

枯野を雪のふりうづみ、なに、ても春のけしきしられず。「心をしかれば」とは、くづをれて居しに、山梁の雉子は時也かな、こゑをた

て、春をしらす也。「山うつばり」とは、雉の異名なり。三月の

花の鳥は、雉子に桜なり。

花の鳥は、雉子に桜なり。

26 一、論語に

身を帰り見る時ぞうつれる

世のうきを三度ももへば日もくれぬ

心敬

吾日三省我身

此「身をかありみる」と云所を、「三度ももゑば」と付給ふこと、悟

る心也。「三思后行」と云語もあり。

九をおもふかなかぬほとゝぎす

三思思惟九止一言

此句心にて、をそく鳴かと郭公へのとちめ、かやうに心なきものに心

を付ること、歌道のならひなり。

27 一、真砂長而成石、小石長而成巖

うきことのかすかと年は重て

おもひの砂ご岩をともしれ

賢盛

君が代は千世にやちよをさぐれ石の岩ほと成て苔のむすまで  
さぐれ石は岩をとなり、いさごは石と成ためしなり。

28 一、敬老如父母

我よりも年のよりたる人を見て

あらばとおもふおやのいにしへ

しらぬ人にも涙をとせり

たらちねに似さへこそ恋しけれ

心敬

29 一、会者定離

旅の哀をかたりてぞ行

この世にてあふはわかれぬ道もなし

心敬

30 一、流水不帰

げに帰らぬやいにしへの夢

去ことを見ればながるゝ水ににて

行助

窓にたづ見る雪の下庵

世捨人かへらぬ水を心にて

宗祇

さきだゝぬ悔のやちたびかなしきは帰らぬ水の流来ぬ哉

31 一、文武両道

おもへばふみやなさけなるらん

武士の弓とるみちはたけき世に

宗砌

大将文のなくたけき斗にては、世は治めがたきもの也。文を学て、用捨して弓箭を取こと肝要也。然者、

文武ノ二道捨一不可

又武士を置によせて、古人歌によめり。

32 一、周穆王八正駒

此八正に騎て西天竺渡、於靈鷲山釈尊へ直普門品四句偈御伝受

鳴てむかはゞあはれとやみん

いかり猪も命をそれよあづさ弓

宗祇

此付句の心は、周穆王大唐と天竺の境に、ちとく山と云山にて御狩をしたまうに、十二つれたる猿、帝に向奉、箭をはなさんとしたまう処に、其中の老猿涙をながして申けるは、「我は此山に住事四百歳也。我むなしくならば、此山の獸共悉く絶べし。可然は、我命をたすけたまへ候へかし。君は則大聖文殊にてまします。我を扶給はゞ、天下納る宝、天馬にすぐはなし、一時に千里をかける馬を奉らん」と申。「帝引給ふ弓をゆるしたまへば、青毛成馬をはじめ、八正の駒を奉るべし」とて、老猿何やらん文を唱へて手を上げて、なん／＼と唱てまねげば、青色なる馬先立、頭をうなだれて、帝の御前に来る。其時弓のつるを馳て、青毛の馬につけて引かせられ、還行ありし、と也。

此前句「鳴きてむかはゞあはれとやみん」と云所を、いかり猪がゞ

まんをやめて、今の狼のごとくなきてむかはら、獵士もあはれとみてたすくることも有べきに、猪にかぎりてむやくのいかりをして、狩人のまゑにかゝりあれくるうほどに、終にはころさるゝなり。

いかり猪の石をふくみてかみてこしさきさの牙さへほとらざりけり

「きさ」は象きさとよむの事、牙をならす事をそろしきものなり。くるひじゝの石をかみちらし狂は、象牙にもおとらぬ、とよめり。

驂、騾、騾、駝、驛、駟、駟、駟、駟  
是八疋の駒也。

### 33一、兒童

おぼゝえずまくらをこゆる風吹て  
菊のながれをくむ秋の山 珠易

此付句は、「枕をこゆる」と云前句に、「菊の流」を付給ふこと、兒童が古事たるべきよし見及候。其子細は、周穆王御ふびんをくはゑたまう兒童、折節帝の御枕をこゑるを、大史官の人はをみて、罪にをとし、つつけん山南陽県と云所へ配流せしに、穆王ふびんに思召せども、左史右史執行するほどに、是非に不及、ながさせたまふ。然れ共、余り隣と思召し、釈導あつとより直に御伝受の普賢四句文授たまひ、「此文を毎日無懈怠唱よ」と教たまう。兒童鉄山南陽県と云所に、千里が間菊生たる沢あり、其沢のほとりに居けるが、穆王授たまう四句の偈こころえをはずれじとて、菊の葉に書て、毎日不怠唱玉ふ。しかれば其菊の葉はなにをく

露、下水をちいけるを、すぐひて飲けるに、葉となり、食をせねども不飢、八百年経れ共不老、いつもの兒童の形にて、晋の世に出て、

彭祖と云者是也。九月重陽菊水、彭祖が教にて初まる、と也。

又、周穆王普賢ふけん品四句偈釈尊御伝受の事は、右のさるに得たまう青毛の馬にめし、西天竺へ渡玉ふ。釈尊靈鷲山にて御說法なさるゝ所へ御出あれば、釈尊見またまひ、「貴客は那処などこより來り給ふ」と問はせたまゑば、穆王、「朕は支那の主」の由を答玉ふ。さればとて、对座なをしたまひ、御說法終て、還行の時、路次其外の祈祷にとて、普賢品四句偈御直に授たまふ。其偈云、  
業一切衆生うご

### 34一、庭訓

ふむや真砂のかすかなる道

子はおやの庭のをしへにしたがひて 宗祇

謂庭訓云本て、伯鯉童にして聖文受、庭訓也。詩不学而勿言。礼不学而勿起事。聞レ一得レ三と云こと。

鯉魚こいぎょ利根褒美のこと。

ひとつをとひて三をこたふる

聞えしとやすき法をやつたふらん 心敬

前句、陳ちん每鯉魚之問答を、付句は三乗合すと云々。陳每鯉魚之問答は、聞詩、聞礼、又聞君子遠其子、是問一得三、是庭訓也。三乗合すとは、法のうゑにて可尋。

35一、梅婦人古事

ひとしきり竹吹しほる風あらみ

梅咲かけはふえのねもうし

兼載

玉だれに風は又ふき吹くて

花散笛のおもしろのよや

珠易

見たしや床しこゑのみはうし

吹といへば笛にも梅のちるものを

木就

此三句、落梅の曲と云楽あり。苔梅のせい、女と現じ、美人あり。名を梅婦人と云。或時笛の楽に落梅の曲を吹ければ、此声を聞て、日影に雪霜のきゆる如に消うせぬ、と也。有女房此美人を始て吹しと云説あり。くはしくは問尋べし。

36一、漁笛漁火

吹笛さびしかよふ山路

ふもと行ふねにすなごる火は見えて

宗祇

此前句は牧笛成を、麓行漁笛成るべしと、漁火にてすはし得たる、と付なせり。漁歌と云とあり。

漁笛詩 一声、漁笛離、南浦

牧笛 山路日暮滴耳樵歌牧笛声

漁火 江村漁火対睡眠

37一、漢高祖紫雲

子をたづねつゝみちまよふやみ

紫の雲にあふちの五月山

繁世

しらぬ山世々をはかりに尋来て昔は人にあひけるものを

「秋天無片雲」と云題にて

漢帝龍顔迷処所 淮王鷄翅失留連

此詩歌の心は、漢高祖御幼稚之時、帝王にそなはりたまうべき祥瑞まします。然者天下より目に立られたまいて、家を捨て芒嶋山と云所へ逃居たまふ。是を御母悲給ひ、跡を追尋たまふに、もとより彼君居ます所には紫雲立を、御母しろしめす程に、雲をしるべに尋給ふと也。詩の題「片雲なし」と云にかないて、「漢帝龍顔迷処所、淮王鷄翅失留連」とは、淮王仙菓をねり玉ふ、其菓うつはものに付たるを、鷄犬なめて、雲上せし程に、雲つらなつて鷄も音を鳴、犬も吠ゆれど、片雲なければ「失留連」と作れり。

さて付句の心は、「子を尋つゝ道まうみ」と云所に、五月闇と云事あれば、紫の雲に似たるあうちの花なれば、高祖の紫雲の古事に、五月闇を子を思ふ闇に付なし、かく思ひよれる也。又秦始皇、漢天下を保玉ふべき瑞相を見つけ玉ひて、御娘に、「此人を尋、夫になし玉へ」と教玉ふと也。呂佑の御事也。

38一、獸吠雲と云事も右古事也

おもわぬ方に犬の声する

仙人の葉のきどくあらはれて

宗祇

そらをかけらん我身とりかな

けだものゝ雲にこゑせし世を聞て

兼載

犬吠天上、鷄啼雲中

前に同事也。

39 一、犬守星

いへくのともし火きえて更夜に

ほしすさまじく犬ほふる声

宗祇

「見文字、則如犬守星」、此語にて付句也。

40 一、犬吠見駟事

旅人さぞな雪のあかつき

里遠み犬ほふるよの月さえて

宗祇

蜀犬吠花、越犬吠雪

蜀は大唐四百余州之北に有、寒国見花なし。越は南にあたり陽国なれ

ば、雪ふらざる也。

あやしや犬のなにをほふらん

春の花月雪ともになれく

兼佐

此句は、見なれぬものにほふると云より、花雪にも兼而なれたる犬は、

あやしくほうると也。

41 一、仙京

桃咲うらはくれないの浪

からくににとらまだらなるいぬほふて

奇犬吠花声流紅桃浦

此付句、前之古事にてきこゆ。

四とき降五葉の松や六の花

大閣

四時四節共に降と云心也。仙京には、ふらせたき時は、冬不及云、夏も雪をふらせたき時は降するほどに、四節共に六の花とは雪の異名也。

七草はけふまた六の花のかな

宗養

若葉の発句也。七草、六の花と風詞のつゞき、殊また雪消ねば、はかな、もとめがたきかななり。

昔ほづくに、

春はまついづれの草も若な哉

とありしを、先達の判に、「若なは、雪まなどにもとの得がたきこそ

かなれ。此句無下となり」あり。

三月三日光山心敬

紅の雪のそのふかもゝの花

心敬

此発句を聞人まゆをひそめて、「紅の雪とはふしぎなる御句哉」と思しに、俄に空かきくもり、紅の雪はらくとふるを、皆人是を見て、

「まぎれぬ心敬は仙人にてまします」と云し、と也。

42 一、漢武帝求仙術玉ふ事

幾秋かへし桃をえし人

古宮の園のあさがほ咲のこり

宗嗣

此前句は、漢武帝仙術もとめんと東方朔尋ねたまふば、西王母を請しかれば、七月七日に承花殿に西王母紫雲に乗来、桃を七枚奉る。四つをば武帝に奉、三をば王母食す。武帝此核を取て貯。王母笑云、「何の料に核を貯」と問。「此桃香ばしくうまし。地に殖んとをもう」と云へり。「此桃三千年に一度花咲実成る桃なり。下土にうゑべからず。此屏風の後にいる童こそ、三度ぬすみて喰し也」と云。東方朔が事也。

又此付句、「桃を得し人」と云所を、桃園の宮を権斎院にゆづりたまひしことを、「古宮のその種咲のこり」と、漢古事をやすく付なすこと、肝要也。

或書文、漢武帝為求長生術、東王父云童問云、以何得仙術乎。童答云、掘池、造座儲於松宮内、燒百和香、灯九灯、調笙樂、七月七日ニ西王母来ラン。習其術、求玉ヘト申ス。于時乘紫雲、駕九斑龍、空中ヨリ五十天仙、俱下、登レ床。仙人雲規絶世、武帝取笏、王母ヲ拜、共座ス。王母以桃七枚、四ヲバ献武帝、三ヲバ王母食ス。武帝取此核、貯。仙人云、何ノ料ゾ。帝曰、珍果ナレバ殖園。仙咲テ曰、不可殖。此桃三千年ニ一度花咲実ナル木也。如此貯アウハ仙ハ難得、トテ還ヌ。東王父とは東方朔也。池は昆明池也。殿は照涼殿也。又西王母来らん所へは、三足の青鳥来ると也。使の異名、青鳥と云也。

みち年になるてふ桃の今年より花咲春にあひにけるかな

桃は金の勢なりと云説、歌に、

賤が園むぐらが下にかくせねどこがねの銭の花はかくれず

桃は梅桜のやうに賞せざるはな也。打見所は梅桜にもをとらね共、和漢共さほど不賞。俗李凡桃とて、昔より如此。

里なき山に犬ほふる声

水ながれ桃咲谷のおくふかみ

宗嗣

43一、龍門滝

かすみがかくれに魚ぞあつまる

行てみんのぼるは遠き滝の門

心敬

三級浪高魚化龍 痴人猶酌野塘水

一切有情、それ〴〵に随ひ、一位づゝあがりたきころがち、世のならいなり。青侍は仲散大夫に登り、武家仲散大夫より三位に上り、公家は三位より太政大臣にのぼり、如此官位階級望心懸、世之習也。小魚も生成して鯉金鱗となり、鯉は又上三月三日に桃花一しふん鯢魚と化して一階飛上。若飛そこなゑば、尾鱗をすりて空なる。しふんげいぎよなりて千年劫さを續て、又一階飛て、しふんげいぎよ蛟龍と化すとなり。蛟龍千年経て、鷹龍羽翼を具足して、飛行自在にして雨をふらす、と也。

因茲語あり。延寺開山弘海御掃なき以前、権者にまし〴〵て、帝王御薬あがり御湯御間のあつきとき、しゆびん御かちをなされければ、水をも入ずしてよき御ゆなり。又有時は生粟などを火もなくて当座に

燒栗になし、節く不<sup>思</sup>儀<sup>の</sup>こと共有之。よつて御信仰かぎりなかりしに、弘海御帰朝<sup>の</sup>時<sup>。</sup>

44一、雪山童故事 釈教

入て見よむら山白き園の雪

心敬

まことの鬼にいかゞむかわん

鳥の音も猶すさまじき雪の山

宗祇

鳥の声きけ雪の山ざと

つねならぬ身をやすくとはおもはめや

宗祇

そのことのはのとくるともなし

雪の山ふたつの鳥の鳴ばかり

雪の山鳥とは、天竺に寒き百鳥、毛もおはぬ鳥雌雄ふたつありて、寒

夜につめられて、先めん鳥の鳴声「寒苦殺我」と鳴、其おん鳥「夜明

作巢」と鳴。其時又めんどり「今日不知死、明日不知死、何故造<sup>二</sup>作

栖<sup>ス</sup>、安穩無常身」と鳴、となり。

二半偈の句、投崖餉<sup>トウケン</sup>餓鬼<sup>ケ</sup>

うぎとものみはなげくともおしまめや

なかばをきし法のことわざ

聴雪

いのちをも捨がならひぞ法の道

岩にかきをくことのはの末

兼載

命をもすつるならひのあるものを詞の半すゑなおしみそ

此半偈句とは、釈尊娑婆往来八千度の御修行の中に、帝釈天虎となつ

て釈尊を氣をためし、頂の上を飛越とて、「諸行無常、是生滅法」と唱て越しを、釈尊聞召、「此二句までにてはあるべからず。慥に末の句あるべし」とのたまふば、虎の云、「われは飢たり。人を服せずは、のべじ」と云。「さらば我身を<sup>あたまん</sup>□□□□。末の二句をきかん」とのたまふば、虎大口をあきて待し所へ身をなげ給ふ。此時、「生滅々已、宿滅為楽」と也。此四句の文を岩に書つけてをき給ふと云事を、兼載付給ふ也。びばしや石と云にかく書付玉ふと也。「苦はむ共、毘婆娑石生滅々已を埋むなよ。雨はふる共、娑羅樹木寂滅為楽を洗なよ」

あはずはかゝる身をもなげばや

法をえし雪の山人世もとをし

心敬

此前句恋なるを、法にあはずしてみをなげ玉ふ雪山童子の事を付またふ。

竹のはに衣かけけるみの向後そよいかばかり悲しかるらむ

衣をば竹のさえだにかけおきて虎にみなげし人おしぞ思ふ

此二首の歌も、虎にみなげし同古事也。

鹿のそのふぞとをきなにある

ふかからぬ法のみ来にちかゝれや

聴雪

此前句、天竺鹿野園の事なれば、遠きと云事を、釈尊御説法来ちかにときかゑたまふことを付なせり。

所によりてかはることのは

驚の山鹿の園生の法の道

智温

伴かへるこれやいち人

聞えぬは莖をまきし法の場

心敬

此句共の心は、釈尊始鹿野園にて、花嚴経、「三界唯一心、心外無別法、真仏及衆生、是三無差別」と説玉ふを、聴衆聞しらで、莖をまきてたちし、と也。其後釈尊御思惟ありて、鷲靈山にては、衆生の氣にしがつて、七宝の大車を出べきと約束したまい、羊牛車火宅のことは譬喩因縁をもつて衆生を訓誨し玉ふほどに、耳をかたむけんと也。是を和泉式部の歌に、

約束のたがいてもの、嬉しきは引ちがへたる法の小車

のどけきもりに鳥やすむらん

髪すぢのちりもはらはぬ世捨人

宗祇

此付句、釈尊檀独山に引籠、六年たんぎの時、苧芽穿膝、御髪に鳥の巢くうと云御修行証て、臘八に見明星悟道あつて、出山の釈迦と申す。

悉捨王位と云心をよめる歌、

法のためおもふみなれば皇あとをだにこそ跡を捨しぞ

こゝろは見えつかゝる山かけ

法は誰たへつ水くみなつみ川

宗頌

此付句は、経文の心にてしたてたる句なり。其経文云、「採菓汲水、捨新設食」

法花経を我えしことは薪とりなつみ水くみつかへてぞえし

薪とり嶺の木のみをひろひてぞえがたき法はきゝはじめけり

もとゆひの中なる玉はいかでえん

おちしかざしの行衛とわばや

宗牧

此前句は、輪王の醫中の珠を得んこと難きと云心を、「悉達太子敷髮掩泥処捨身求偈月光切頭尸毘鷹飼餌」、此文の心にて、「をちしかざし」とは付玉ふ也。

来てかくれすむ柴の戸のうち

人をさへかり場の鳥やたのむらん

宗祇

此付句、鳩の秤の古事にて、尸毘鷹に飼餌と云古事也。

釈尊尸毘王と申せし時、日々一疋づゝの鹿を贄にし給ふに、白鹿王鹿どもを下知して、一疋づゝの贄をたて給ふに、有日の番に当たる鹿、

「我腹の内に子あり。此子うまんほどはゆるし玉へ」と白鹿王へ申に、「さらば」とて別の鹿に、「今日のゑにたて」といゑば、其鹿、「番にあたりたる鹿さへゆるさる。況番にあたらぬみにて、にゑに出入事、いや」と辞退しければ、「是もことはり」とて、「此上は無慥」とて、

白鹿王殺れて贄に立玉ふ。此由を尸毘王聞召、其時の詞に、「汝畜にして畜に非ず。我人にして人に非ず」とて、其後は狩を止給ふ時、鳩雀つ大たかにをはれて尸毘王の草庵へ飛入、「たすけ給へ」と云。大鷹は、「此鳩をたまはらずは餓死」と云。其時、鳩をもたすけ、たかをもたすけんとて、我股の肉をきりて鷹にあたへ給ふ。此肉鳩より少しとこう。其時鳩と肉とをはかりにかけ合て、たかにかい給ふ。是を鳩の秤と云。

和泉式部、小式部が七に成時、嵯峨の釈迦まつれて参しに、小式部母に問り、「これは何仏」と問。母式部其時の歌に、



問ずとも誠の道は我としれ恋をば人にならふものかは  
とよめるなり。其時小式部のよめる歌に云、

これやこのうゑたる鷹にゑごわれて鳩のはかりにみをかけし人  
かくよめるとかたりつたふ、と也。

かりにも出じ室の戸のうち

贅にたつ鹿の心に身をはじて

長俊

櫛つむ法の古寺たかのいで鳩をこふるや心なるらん

たきすてよかずかく文にわがおもひ

まことの法はむねにのこさじ

肖柏

不持捨不覚忘

さとのぞよおもふ心を打捨てすつる心のあるを忘よ

世中はひとひひと夜もやすからで

ときをわる法に身をもほとろけ

始鹿野園終跋提河に而四十九年、涅槃經にて説をはり給ふことも、一  
日一夜ととけり。

もとのさとりを心にはゑん

色にそむ花を一ふさわが折て

心敬

世尊不説ノ説、迦葉不聞ノ聞、

さま／＼にとけどとかれぬことのはをきかずして聞人ぞすくなき

此心は、大慈世尊涅槃に入たまゑるきはに、唯一大事因縁正□覺得を  
あらはさんとて、花を一房拵てあげ給ふ。しかるに、我はさとりを得  
ることなくて、色にのみそみて花を折と、心敬卑下の御句也。世尊拵

花、迦葉尊者破顔微笑、□金襴衣を附属し給ふに、徒らに花を折、さ  
とりを得ぬ事をなげくよしなり。

みのりの末になるぞ悲しき

むれゐしはいきしら鷺の池あせて

兼載

跋提河のほとりに白鷺池と云池あり。涅槃の在所なれば、「みのりも

末になる」と云所に、白鷺池を付給ふ、と也。

かぎりの春やうらみならまし

いかなれば八十をのべずわかるらん

心敬

涅槃いましてしものべて界を道引給ゑかし、と云心なり。八十涅槃と

天台にいゑる。

八十あまりの木々／＼いろ／＼

枯にけり仏さりにしその林

智温

鶴のはやしをおもひこそやれ

降雪のけふりをうつす鳥べ山

宗砌

新つき雪降しげる鳥べ山鶴の林のこゝちこそすれ

此歌連歌、鶴林双樹栄枯の理をあらはせり。栄枯のさたとは、沙羅双

樹八本あるが、四本枯て四本はかれぬ、是不生不滅の理也。涅槃不生、

槃言不滅。しかれば二月十五日に涅槃なれば、又やがて四月八日仏誕

生なり。此事を、

これやさほ消し霞の行衛かはやがて卯月の光をぞ見る

此歌、涅槃、誕生を一首によめり。

今朝ふるは鶴の林花の雪

恕哲

二月十六日に雪のふりけるに、かくのごとし。釈尊御入滅にはつる。

残るみのりのすゑの世中

かくれても仏やを人をすくふらん

宗祇

子をおもふとやたちどまるらむ

たのもしなつねにあるてふかのほとけ 宗祇

「其中衆生悉是吾子又常山靈山」、此經文にての付句也。

孤となに嘆きけん世中にかゝる御法のありけるものを

南無文殊三世の仏の母と聞我も子なればちゝこそほしけれ

「みなしご」とは、親なき子の事也。「孤」とかく也。

あひみての情をしらばいかならん

すゑの世までの法のたらしちね

肖柏

45 一、法薪

うきを便とたのむおくやま

採たびに薪つきなん日をまちて

宗祇

如薪尽火滅

法のためにのふ薪にことよせてやがてきえなん火を待にける

胸火滅す事、安心也。

46 一、五形ごけい

みづのうごくに風わたる見ゆ

人のみに五のすがたあらはれて

能阿

地水火風空 木火土金水

水はみづつ火はもとの火にかへるとぞおもひしことよすはさればこ

そ

47 一、残灯

いましもまなぶみちのくやしき

灯もいのちものこりすくなきに

宗長

前句は晩学の心なるを、付句は残灯にて付給ふ。人間の胸の火にたと

うる也。いなりの明神の御替の歌、

我たのむ人の命をてらすとて浮世に残る三の灯

を二本づゝ靱玉ふ也。

有射物破、有ニ生者滅。

あはれは尽じめぐる春秋

かたちあるものみなさかへおとろへて

桃華殿

此付句も柴枯のことはり也。

48 一、衣裏宝数

衣のうらや袖のしら露

雲かゝる鷺の御山の月かけに

吹かへす鷺うさぎのかぜなかりせば衣のうらのたまを見ましや

付句、此歌にて聞ゆ。

いむことうけつうけがたのみや

すゝむれど酒のさかづきてもふれで

真

こゝろみだるゝ酒のさかづき

一たひにたもつかひこそなきみなれ

宗長

花の本露の情はほどもあらじゑいなすゝめよ春の山風

もみちも我をすゝめてぞちる

風さむみ酒あたゝむる冬の日

行助

林間暖酒焼紅葉

林あれて秋の情も人とはず紅葉を焼し跡のしらゆき

此歌の心は、昔堯王の御世には、草木までも神変奇特の事あり。紅葉

を火とくはんねんして、紅葉の上に酒を置ば、あたゝまりけるとかや。

末世漢季なれば、さやうの神変奇特もなし。しかれば林間に酒あたゝ

むるもてはやしもなきほどに、五文字に「はやしあれて」とをけり。

「秋のなさけも人とはず」とは、さやうにもてあそく人もなければ、

たまゝのことには、紅葉をちぎに焼て、さけなどあたゝむる。しか

るあいだ、「紅葉をたきし跡の白雪」とは、灰の事也。

平家に紅葉の巻に、ともの宮つこあさきよめして、さけあたゝむる

ごとし。

あたゝめざけにゆびをこそさせ

竹の葉にをしへしやどはかくろひて

聴雪

借問酒家有何処 特童除指杏花村

「杏花村」とは酒の事也。和に、「からもゝをくむ」とするも、酒の事也。沽酒の家をゝしゑも、五百生の罪と云事あり。

つみいかにとも誰かしらまし

ともなひてうれへを酒のたはぶれて

宗祇

此付句、「ともなひてうれへて」と云所、酒家をしゆる心也。

人によりてのいましめのみち

酔にたゞみだれぬ酒はくすりにて

肖柏

釈尊禁誡にも、祇陀太子には酒をゆるし玉ふぞ。其故は、酒を飲

猶々精氣すぐれたまう。遮迦陀、此にはいましめ給玉ふと也。

はかなやさけに心とけけり

おそろしや女もたけきはかりごと

宗碩

神功皇后の継子応仁天皇御謀叛ありけるを、神功皇后兵を以其防戦を

せんと思召めせば、御用心油断なければ、相坂山にて女房に酒をあづ

け、はかりたまう。酒の上にて女房君をあざむき奉るといふ。日本記

にみゆる、とあり。

鬼にまされる人のたばかり

毒となり葉となるも酒なれや

芳能

酒点童子と云鬼をば、銚子もろ口にて中にへだてをなして、一方には

式の酒をつぎ、一方には毒の酒をつぎて謀る、と也。それにより祝言

の時、銚子にて片口つゝみて出す也。

酒是百葉頂、過百毒頂、と也。

そのあかつきとおもふはかなさ

庭鳥のこゑにひるねの夢覚て

茅屋午時の鶏、

乱暮をうつそのまにも劫ありて

石をもつくす天の羽ごろも

君が代は天羽衣まれに来てなづともつきぬいはほならなん

49' 一、劫より劫のつもり終もなし

ほると見えてぞつちはうきたる

法の水ちかづく袖のうるをいて

漸見<sup>あ</sup>涅土泥<sup>つ</sup> 決定知近水、

みちなるこちぞむさしの、はら

人によるほりかねの井ぞ法の水

武蔵野に法を付ることは、宿空上人武蔵野に草庵を結び、草の爪木を

ひろい、をこない給ふ。ほりかねの井も此上人のあかいのよし、申つ

たう。ほりかねとは、水の出がたき井なれば、ほりのねたる井也。

がきの目にこそ水はとをけれ

ほりかねの井はほど、をし八瀬の里

とつけ給ふを、心敬の御判に、「ほりかね井、やせのさと、がきに同

意の連歌也」との給ふ。「我ならば」とて、

海川の流は四方にみちくして

「これらにてこそ餓鬼の首尾なる」としるし給ふ也。但又、ほりかね

の井を付るとも、

人によるほりかねの井も法のため

これにて付べきとなり。

心にのるはいひしことは

たのみつゝ、わたりに来れば船もなし

此付句は、「如渡得船」と云へば必舟に乗べきと思ひ、渡に來りてみ

れば舟なければ、心にのりしは、はかなき、と也。

50 一、砂為仏塔

石をあつめてたよりにぞなす

いときなきも終にやいらん法の道

乃至童戯、聚砂為仏塔

かりそめに重ぬる石のみ仏も後は闇路のしるべをやせん

法花経文の心を貫之よめり。

51 一、伯母捨山本説 釈尊伯母七種の恨、別紙に註之

生合て末の法をもつたへけり

うき伯母捨の山のはの月

後にぞ法の心をばえし

うらみつる伯母捨山の月はれて

恨つる心も今は晴にけり伯ば捨山の有明の月

わが心なぐさめかねつさらしなやおば捨山にてる月をみて

此説は、仏の伯母橋曇弥并誕也云事也。有双紙に、昔信濃国に、有男伯母を持つるが、月をおもしろがり、高き山にてみたきとねがへども、老女のことなれば、独りはことならず、をいをやとい、「われをさらしな山へ手を引て登せ、月をすてよ」といゑば、むづかしく思ひけれども、しきりに雇はれて、手を引、山へ登せけるに、枝折をして登りけるを、おいの心には、此枝折はかゑらんのためのゆうとをもち、此まゝ山にすてをき、我斗り帰るべきとをもうに枝折をするよとをもち、あとよりとり捨ける。扱さらしな山に捨をきて我斗りかへるに、無道なる心なれば、帰路に迷、ついでに死けると也。其後より伯母捨山と号す。

奥山にしほる枝折はたがためぞ我みを捨るひとの□□ため  
すてらるゝ迄も人をおもふ所、慈悲第一也。

52 一、鶏足山古事 入定、天竺に迦葉、大唐に靈門、日本に弘法、三國不死之人と云

おもへばうすき墨ぞめのそで

鳥花をふくみても来ぬ山のおく 心敬

此心は、仏涅槃の後、迦葉尊は鶏足山に引込山居なきるを、禽獸までも香花をくはい奉と也。迦葉、禽獸にしらるゝまで我修行あざしと思惟なされての一隆の後は、鳥獸もまいらぬ、と也。こゝを、「もへばうすき黒染」と云所を、「鳥花をふくみても来ず」と付給。禽獸も不及所也。

白鳥禽花献 白鳥不献花

53 一、趙洲庭前柏樹

西より来る法のみちかは

色かへぬ樹のかけはしづかにて

宗長

此句、宗祇宗長基助三問答前句付の句也。

西より来る法のみちかは

にほひふかく水の花咲夏の池

基助

日本記に、水の花は蓮は事也。此花西方浄土より飛来り、醍醐味にまじはると也。小乗は四大四味とたつる也。四味を解して醍醐味を得て、大乘妙典也。苦、甘、辛、鹹。

しみとけて醍醐の池に咲花は皆妙法の蓮花なりけり

54 一、鶏八声

あだなることを人にしれとや

にわ鳥の八こゑも鐘も常ならで

兼能

「今日已過、明日漸近、今生已尽、来世漸近、身如朝露、向風消安、命似暮華」鶏の鳴声如此鳴、と也。鐘の声、従来四句の文なれば、いづれも世のあだなることはりをしれ、とつぐるこゑ也。

55 一、勤息観

鐘の声かづへつくせば明はて

いづるいきをぞ法につとむる

聴雪

此前句、百八のねりかね十八はやり、鐘十八と六と撞ことを、「かずへつくせば明はて」と云所を、真言の秘密に、息をつとむると云事をあり。出息入息の呼吸の一息を、入息ばかり一二三と十まで吸ため、出息に吐て、又は入息ばかりに十吸て、胸臆の妄念はらすこと、秘密の事也。他事なきこと安心なり。是教者の道也。

56 一、歛念

目をとちてしれ人のよしあし

咲ばちる花にみださじわがこゝろ

はかなきをはかなきとみば涙にて

落る木のはも常のことほり

飛花落葉観

ひとをばいかでをしへたつべき

よこしまにも心よ法のみち

善悪不二、邪正一如、

うきみにけふも又くらしつゝ

世中をおもへば鐘のひびきに

山寺の入相の鐘の声ごとにけふも暮ぬとおどろかれつゝ

曹山和尚聞鐘阿耶々々、

心ひとつを分かつたもなき

唱れば我みさながら仏にて

となふれば仏も我もなかりけり南無阿弥陀仏の声ばかりして

此歌は大覚禪師と一篇上人問答の時、大覚禪師より念仏の話をあづかりてのちよめる、一篇上人歌也。

初先大覚禪師座禪なさるゝ御前へ一篇上人打成、一片念仏を申、をどりて出たまうを、目をかけずましますを見て、歌をかけ給玉ふ、

おどりはねかふをだにもかなはぬにいねふりしてはいかゞ成べき

大覚禪師御返歌に、

おどりはね里穂ひろふ村雀驚のすみかはいかゞしるべき

是より御弟子になり給ふと也。

もとのみもげに彼国のあるじとて出入いきの仏なるらん

善道和尚口より化仏を出す、と云ことをよめり、

阿弥陀とは迷さとの道たえてたゞてなにかよふ生仏かな

南無阿弥陀なむあみだぶと唱ふれば幼鳥とぞ身は成にけり

己身弥陀、唯心浄土、

一念弥陀仏、即滅無量罪、

説のこす御法とは、念仏の事也。

のこる御のりのいまの世中

かくれても仏を人をすくふらん

弥陀は西方十万億より来迎、引誘し給ふ、と也。

宗祇

57 一、二仏中間

あかつきの心にかよふそのむかし

仏ふたつの世中ぞこれ

賢盛

寺はよそなるをはつせの山

後さきの世程中間たゞし

智温

あかつきを高野、おくに待ことは苔の下にも有明の月

前仏ハ已去後仏ハ未出<sub>レ</sub>世夢中間

釈尊入滅弥勒未出世三会の暁待、三國に三人、天竺迦葉尊者、大唐雲門、日本弘法、不転肉身の仏にてまします。

58 一、六道輪廻

なれてはなれんころともせず

何事かむつまじからむろくの道

宗砌

我頼むな、の社のゆふだすきかけても六の道にかへすな

此歌、天台座主、山王七社へ、六道輪廻するな、と御誓願也。

58' 一、上載舟下載舟

よく捨ること法のみちなれ

船につむたからは罪のおちて、<sub>レ</sub>て 木就

此心は、麗居士かぎりなき富貴にてありしが、財宝は臨終のさほりに  
もなりぬべしとて、舟にのせて海上に漕出で、海中へ宝を取捨て、  
日々竹にて箆篋を作て、娘の靈昭女にうらせて、一生涯を送ること也。

宝をつみたる舟を上載舟と云、宝を捨てもどり船を下載舟と云、と也。

又此宝を海に入る、いかならば人に出さぬよしをいふば、我がはろ  
しとて捨る物を、人にいださんこと、かなうまじ、と云也。

赤土塗<sub>ル</sub>牛<sub>ル</sub>妳<sub>ニ</sub>

59 一、玉台

三とせにぬる、法のさ衣

なきが跡あらためざるをなげきにて

心敬

三年不<sub>レ</sub>改<sub>ニ</sub>父道<sub>ヲ</sub>言<sub>フ</sub>玉台<sub>一</sub>

此前句、三年にぬる、法の衣をはしの心になして、なき跡を三年あら  
ためず、愁歎する、と付給ふ。

60 一、誰話

いつより人をおもひそむらん

我をだに誰ともしらぬ先の世に

宗砌

誰なればふるきすみかをたのむらん

心に老が身になやどりそ

心敬

釈迦達磨渠<sub>ハカシガ</sub>奴<sub>ハ</sub>渠<sub>ハ</sub>是誰<sub>、</sub>

たそく<sub>レ</sub>とたそと問<sub>ヌ</sub>どもたそはなし誰そと尋<sub>ヌ</sub>るかれはたそ

此付句吟味不可得<sub>レ</sub>問<sub>フ</sub>他<sub>。</sub>

岡のべの里あるじを尋ねれば人はこたへず山をろしかぜ

此山風の吹やむ時、あるじに相看すべし。

61 一、梁武帝達磨の問答

ふし木に袖をぬらしこそすれ

是やこの梁の武帝のものおもひ

此誹諧の前句は、番匠がふしのある木をけずり兼てなくくけずる、人ふといひ出したる前句なり。りこんなる人、かく付る古事をあつめぬれば、書いるゝもの也。

武帝問、達磨曰、如何、是諦第一義。答話、廓然無聖。重問、対朕者誰。不識。

武帝不識につまり給ふことを、木のふしにとりなすこと、歌道のならいなり。

### 62一、香麿寛

いかにしてさとりがたくはおもふらん

おもひまぎれぬよるのたきもの 心敬

此付句、香丸のさとりにて句をきゝてさとるに、我は薫の句がかゞれぬに、法を得ぬと例也。心敬は卑下の御句也。

### 63一、娑婆往来八千度

いたづらに世々をつくすも法のため

幾ちたびまで生かはりし 聴雪

身をすつるこそ人のためなれ

いり難御のりやすくときかへて 宗祇

法のためをばいたづらにしつ

小車にくるしむ牛と生来て

うしのちからを我もからばや

みちあさき法こそ鹿の車なれ

山のはの月にぞのりししばしこそ野へ行鹿にかくる小車

世中に牛の車のなかりせばおもひの家をいかゞ出まし

とにかくに三の車のわかれてもひとつ道にやめぐり逢らん

### 64一、三車火宅 羊鹿牛車の子細するすいとまあきならず

竹葉羊車過別院 今夜空聴曉落鐘

やくそくのたがひてものゝ嬉しきは引違ひたる法の小ぐるま

### 七宝大車を約束也。

### 65一、葬送竹禁

ひけるたもとぞいとゞぬれそふ

なき人を送れる野への琴のこゑ 心敬

わかれてはいつはためぐりあひもみん

なき人をくる野への小車 同人

大唐にては、貴人の葬送には、車にて管絃にて送ると也。車にてそのまゝ埋と也。是をみさゝぎとか、みつきとも云。みふたはねと云事、二年にても三年にても、又四年あつても、みさゝぎのうゑ土かさぐるこゝとあり。是をみて奏すれば、御祝ありと也。但是は崩御にばかりかざるとなり。又平人をも車にする、と也。顔回死時も、父顔路孔子



の車をかれと見え<sup>み</sup>てたり。

66 一、発心

すてんとはおもひもよらぬ世なりけり

わかき心をおこすあわれさ

兼載

此前句、世をすてんことは、年たけてこそおもひ立もの成に、若輩の者発心修行をほこす事、おもひもよらず、と付る也。

67 一、会者定離、愛別離苦

おもひあはせて涙をちけり

ならひうき世になかあふにわかるらん 心敬

68 一、三歳兒童皆念得

この心こそ仏なりけり

みどり子はまだおもひ分こともなし 心敬

いとけなきよこ路の空に見し月よ月こそ月よあじきな世や  
智恵を妄相<sup>まや</sup>なり。兒童の氣にならん事かたし。

69 一、一樹陰宿、一河汲流他生縁

ふかきちぎりは末もかはらじ

何つらきおなじ水くむ里見えて

宗砌

人はあだなる契なるらん

かりにくむ流も水はたえぬ世に

宗祇

山河におなじ流をむすびても猶あさからず契りとぞ思ふ

ちぎるともえやは一樹のしたすぎ

宗牧

此発句は、笠間の大嶺上落して宗牧にあひ申、「関東へ御下向ならば、一折興行可申」とあらましせしに、宇都宮へ御下向と聞て、宮中へ罷越、宗牧御宿参、宮中にて一折興行の時、折節夏なれば、如此。一樹のかげの下すゞみも、他生の縁となさる、と也。

70 一、好事不知無

うきことまたん身とおほえず

老ぬればなきにしかじの世中に

能阿

おしむこそ世にある時の哀なれ

宗祇

よきことさへ、なきにしかじ、と也。無事簡要也。

71 一、電光朝露石火

爪木のしづがうち侘る暮

石の火のかげに我身をわするなよ

心敬

しらず仏や世々に出まし

はるけさは其暁にかぎらめや

宗祇

いで、何ぞの世をばおもはじ

あひがたき其暁の仏たち

恕哲

暁を高野の山に待ほどは苔の下にも有明月

はるかなる其暁はまたずとも空の気色は有明月

いでん仏はきくも遠き世

雲まよふかねのみたけの郭公

兼載

みよし野の金の御嶽かねならば弥勒の世にもあわざらまじを

此歌連歌の心は、芳野金峯山金剛藏王権現、三会暁弥勒出世あゑとて、金を埋をきたまはりたまう御誓願ありと也。弥勒出寺布金のため、惜しをき玉ふ、と也。

又弘法大師、不転肉身仏体を得むとて入定し玉ふ。或人を高野山歌云、

焼ば灰埋ば土に成物を不覚ならや不転肉身

御返歌に

焼ば灰埋ば土に成物を其れ社其れよ不転肉身

又弘法入唐なされ仏法成就御帰朝の時、三鉢を投させ玉ふに、金色光を放、雲にうつろい、日本地に飛渡申、高野山の松梢にとゞまり、又歌に、

色かへぬ種をやなげしものこしの法も高の、松の木末に

## 72一、梅檀香

とむるこそ便ともなれすみのそで

仏の御国おもふ花香

肖柏

吹風に花たちばなや匂ふらん昔おぼゆるけふの庭哉

梅檀香風 悦可<sub>ニ</sub>衆心<sub>一</sub>

此心は、靈鷲山にて釈尊御説法被成時、せんだん香を焼せらるゝを聞て、御説法はじまるとて八万大衆悦であつまる、と也。此古事也。

## 73一、自立他破

つかふるやあらそふ道をたてぬらん

ながれはひとつ法のみなもと

宗長

わけ登る麓の道はかはれども同じ雲井の月をこそみれ

五家八宗とて、律宗聖禪家各々我宗の意趣を立、他宗を破するならいなれども、をちいはおなじことなり。

## 74一、止観

我みを雲と見ればまよはず

月きよみ胸の大空霧はれて

ほのくくと胸より出る有明をよその月とや人はみるらん

一心三歛月無明照<sub>ノ</sub>闇<sub>ヲ</sub>

天台止観也。

## 75一、仏法東前<sub>新</sub>

遠くわかるゝ行末の道

東こそ生れあふせの法ならめ

宗長

此前句、「遠くわかるゝ」と云所を、天然靈鷲山より日本までは、げにも遠くわかるゝと云所、勿論一句は仏法東前也。

76 一、四門<sup>回</sup>

かへるならひの旅のかりがね

北へ行人はこの世にとどまらず

心敬

此前句は、雁は南へ来て北へ帰るものなり。付句は、雁は南北へ往還すれども、人間涅槃門へ入ば、二度かゝらぬことなれば、人はとまらぬとは、文字にて付給ふ句也。発心、修行、菩提、涅槃、前句の心は此歌の心也。

行かへりこゝもかしこも旅なれば来る秋ごとに雁くとなく

此世はかりの世なり、と鳴也。北へかへるも、ねはんもんの心也。

77 一、随上中下各有所受 経文、葉草喩品

なにと涙の袖にあまれる

草も木も葉にしたへる露の世に

宗頌

をしなべて同じ草木も降る雨も葉にしたがひて結ぶ露哉

此付句、にどまりの手本なり。詩賦言語にて連歌。

78 一、世間不自在

たかきにもいやしきみにもつくおもひ

ついにゆるさぬゆきの黒髪

宗頌

公道世間唯白髪 貴人頭上不曾饒

言説ならくの底に入ぬればせつりもしゆだもかわらざりけり

天竺四姓 殺利、首陀、毘羅、婆羅門。

刹利王氏の事、首陀は農夫の事、奈落にしづめば、貴も賤も同じものと成也。是自在の道理也。

79 一、夜壁有耳

恋わたる壁に見ゆるもなになれや

ものかたはらばど耳もこそあれ

まどろまぬ壁にも人のみゆる哉まさしからなん春のよの夢

前句の「壁に見ゆる」とは、妄想の事也。付句には、「壁にみゝあり」と云心付なせり。

80 一、晩学

まえみし文にまたぞむかへる

わかき世にまなばぬ道はかいもなし

心敬

前句は恋の文なるを、付る心は、若き時は師のいましめもうらみてよまざりし文を、悔て又むかうは、晩学にてかいもなき、と付なせり。

顔子曰、幼而学者如日出之光、老而学者如秉灯夜行

81 一、狐疑心

きつねなく暮の灯きえもせて

うたがひおほき心なりけり

兼載

まよはぬ法の灯もがな

狐なく道のすへ野に寺見へて

宗砌

霜妨鶴渡寒無露 水結狐疑有薄露

「狐疑渡氷」とて、疑心をき獸也。氷の上をば渡らんとて、あやぶみて且渡らんとし、又立掃り、かつき、かつわたらんと思惟する内、日も闌、よりどころなくはたるとて、氷日のさすにしがいてうすくなりたるを、踏破り落る、と也。是を世間人に尤分別すべき事、狐疑のそらうたがい、猶預のうら思いとて、嫌事也。かくは又あれども、聊尔はかなうべからず。狐めは人をもまよはし、我とまようとうたかと云ことく常也。

82一、十日之菊

後のあしたに又ぞねにけり

人はよもとふかの菊に蝶の来て

兼載

きのふの花にけふもうかれぬ

こてふのみまがきの菊にめぐり来て

宗長

節去蜂愁蝶不知 曉庭還繞折残枝

此詩にて付句の心は聞ゆ。

83一、蝸牛争

はかなしや我家がほのかたつぶり

あらしふことやさてもなにごと

晴雪

蝸牛角上争何事

此心は、蜀国蚕国二ヶ国蝸牛の角の上にたつ国たるほどに、不断戦不止、と云へり。又云、蝸牛角を立ちがまゝすること止事なし。其ごとく蜀蚕二ヶ国中はろく、戦止時なし、と也。

84一、安部仲丸

恋しささそふ秋かぜぞ吹

ちるらめやわが古里のは、そ原

智温

もろこしの木末も淋し日本のは、その紅葉今や散らん

古郷有母秋風渡 旅館無人暮雨魂

此歌は、安倍仲丸入唐して、日本に老母ををきけるを思ひてよめる歌也。又此詩は、黒白取用抄に、鬼取ひしくと云鉢とて、感情ふかき第一にしるし玉ふ。此詩歌の心は、古郷に母を置いて、いかゞあるらんとをもしやる時分、秋風吹立、は、その紅葉はらくと打散をみて、物淋しく思ひ、弥母のつれづれを思いつづけ、いまほどもしもはかなくもなり給ふらんと相像は、旅の宿に我あるとも、をぼゑずはらはらと落涙する、と也。付句の心は、歌と同じ心也。

85一、住吉明神白楽天

ひとの国まで神ぞおさめん

住江やしほぢいくえの和田原

此付句は、「他の国」とは、日本より大唐、新羅、百済国をさして云也。「他国」とかきて、人の国とよむ也。扱「人の国迄神ぞ納ん」と

云句に、「すみのゑや塩路いくえの和田原」とは、住吉明神、楽天と御問答に勝せたまいしより已来、海のをもては、ちくらがをきをうちこゑて、大唐の内迄日本のまゝたり、と也。其子細は、白楽天日本の智恵をはかり、智恵にかちたらんは日本をしたがえんと思ひ、船に乗る日本に趣玉ふを、住吉しろしめし、漁人の姿となり小舟に乗給ひ、釣たるゝていにて楽天の舟に乗向給ふに、楽天漁翁に問云、「日本にて何をかしよさとする、何事か有」と問ひ給へば、「別に所作なし。日は東方より必西にしづみ、人は生て死する。是より外に別の義なし」と答給ふ。楽天、大唐にも別にかはる事なければ、重て問べきことなれば、目前の景氣を詩作給ひ、漁翁に見せ給へば、住吉歌を以詩の心をあらはし給ひ、ことに詩作の不相応の所を難する心の御詠歌なれば、此歌を白楽天見給ひ、「此漁人をさゑ智多有。況公家武、いかなる宏智博学の人もあらん」とて、船を漕もどし玉ふより後は、大唐をかぎりに海のをもては日本のまゝ。

白雲似<sup>レ</sup>帯廻山腰 青苔白<sup>レ</sup>衣掛<sup>ル</sup>巖肩

苔衣きたる巖はさもなくてきぬく山は帯を社すれ

衣もきぬ山には帯をし、こけ衣きたる岩にはさもなきは不相応也、と云心の歌なり。

## 86 一、馬鹿之故事

みつよつはなつ馬ぞやせたる

鹿をさしている矢のさきのかずくに 心敬

此付句は、「みつよつはなつ」と云所をば、箭かずを射に付なし、馬を鹿に付る事は、本歌にてしたて給ふ句也。

鹿をさして馬といふ人しありければかもをもをしとおもふ成べし  
返歌

なしといへばおしむかもとぞおもふらし馬やしかとぞゆふべかり  
けり

此歌は、ある人いるまの鴨と云鳥をもちけるを、又有方より所望しけれどもくれざりければ、如此よみてやりけり。心は、「鴨をも鴛」と、惜と兼てよめり。「鹿をさして馬と云人有ければ」とは、鹿を馬也と偽りていけるためしあれば、「鴨をもをしと思ふ成べし」とよめるを、返歌の心は、なしと申せばおしむかもとぞおほしめし、さこそばかとおほしめすらん、との返歌也。

さて、馬鹿と云根本は、昔大唐に秦子嬰の位を、起高と云臣奪奉、我王にならんとをぼしが、もろく臣下の心をうかゞい、我方によるか子嬰の方によるか試にして、鹿をひとつ捕、「是は見事の馬なり」とて、秦二世子嬰に御目かけらるゝ。二世も御覽じ、らせられ給ひ、「是は馬にてはなし。鹿也」との給ふ。起高其時、「慥に馬にてあり。御不審ならば諸臣下をめて問はせられよ」と申。其時大臣公卿をめし出し、「馬か鹿か」と問はせ給ふに、いづれも起高が威勢にをそれ、諸臣下、「是は馬也」と申。起高、扱はいづれも我方に異義なしとをもひ、位を奪奉、と也。是より人をばかにすると云文字「馬鹿」と書、又は忽<sup>ト</sup>正<sup>ト</sup>軀<sup>ト</sup>なきばかに「馬嫁」と書、又あるいは勇すぎて無用の所

にて打死などし、分際より過分の振舞などして家をうしなうばかりには「破家」と書。如此書わくると云とも、「馬鹿」が本説也。

鷓鴣難<sup>レ</sup>交<sup>二</sup>春眼<sup>一</sup> 鹿馬易<sup>レ</sup>迷<sup>二</sup>仁世<sup>一</sup>心

又或書に、鳩たかと交と云故事あり。

馬か鹿かとまどふをちかた

たかとなり鳩となる世もむかしにて

此付句は、鹿馬迷易と云対句にて、鷓鴣と付る句也。

### 87一、五雨十風

雨もしれ出るを契る秋のかぜ

心敬

此発句之心は、堯の御代には、一月五度雨ふるか十日に一度之風吹故に、天下豊五穀みのる、と也。一月六度どの雨は、五日に一度づゝ也。是三十六の雨と云也。

五日風不<sup>レ</sup>鳴<sup>レ</sup>枝<sup>一</sup>、十日雨不<sup>レ</sup>穿<sup>レ</sup>塊<sup>一</sup>。

此語の心は、十日に一度の風、五日には枝をならさぬ風也。五日老度の雨に定れば、十日迄は不延。又あらし雨こそは、土をも穿ほどふらめ、五日に一度づゝ、湿雨なり、と云心也。

### 88一、巨靈神

和云、長三寸の心也。漢武の世にも出しと也。東方朔是巨靈神也と云

月の入山にむかしの人もがな

宗祇

此発句の心は、夏禹王九年洪水、為<sup>レ</sup>民自身提築掘<sup>レ</sup>溝水塞<sup>一</sup>、九年間沐<sup>二</sup>甚雨<sup>一</sup>、梳<sup>二</sup>甚風<sup>一</sup>とて、無隙御辛勞、天道憐給ふ故、巨靈神出て

大華山を蹴破、水を落し給ふ程に、社稷跡より種を蒔給ひ、目出也。  
此発句の心は、月の入山をも巨靈神けやぶらば、月の入山もなくて、心のまゝに詠めん、と作也。

いまこそ殖したみもやすけき

九とせくるしむことのいかばかり

尚能

此付句、右の故事九年の洪水の古事なるべし。社稷は今の田神也。

夏禹王股無<sup>レ</sup>肢<sup>一</sup>、脛無<sup>レ</sup>毛。沐<sup>二</sup>甚雨<sup>一</sup>、櫛<sup>二</sup>甚風<sup>一</sup>、置<sup>二</sup>万国<sup>一</sup>。

### 89一、六欲天

けふのみや見るめあふるせ天川

宗碩

此発句、宗碩もずいぶんとをい、人もほめしを、宗長御覽じて、「御作は聞え候へども修行相違」の由、不審をかけ玉ふ。そのゆゑは、見るめをちぎりになすは、六天の頂上他<sup>二</sup>天上<sup>一</sup>の事也。歌に、

しわうには形をまじへやまはだきとゝりらくゑみたけはめがあり

此歌は、四天王、夜摩天、忉利天、都支天、娑婆化天、他化自在天、是欲界の六天也。四王天には、此下界のごとく会交する。衣摩天、抱を契とする。忉利天には、手を取るを契とする。都支天、手を取を契とする。娑婆化天にては、咲を契とする。他化自在天、目を見合するを契とするに、牽牛織女の契を、「見るめあふるせ」とは不審のよしの給へば、銀河海松は生ぬものなれども、みるめあふる瀬と歌道のならいなれば、心なきものに心を付、めに見へぬ鬼がみ。

手をと리카はす情もぞある

久方のすみの契りのさまく

此句、切利天の心を付る也。前句そのまゝ切利天のことなれば、須弥の四州さまくの契、と付候哉。

90 一、列子古事

雲の上にも人声ぞする

風にのるためしを誰かうつすらん

兼載

空にたゞたより待てふ佗人も風のおさまる世をやるらん

91 一、鶴之駕の古事

はしなくていかゞのぼらん天つ雲

願ひをみつるのりものもがな

繁世

此付句は丁令古事にてはなし。昔四人して各心々のねがひをしけるを、こしに十萬貫を付て鶴にのりて雍州へ下たきとねがう。一人は鶴に乗て天に登度とねがう故事あり。此心にて、「ねがひを満る乗るものもがな」と付給ふべし。又魯般が雲梯と云事は、秦國より燕國を攻時、燕城郭高山にて攻べきやうなきに、魯般が雲に梯をならして、燕をせめしたがよし、と也。又唐玄宗皇帝の時、羅公遠天に向て杖をなげしに大橋と也しに、玄宗楊貴妃をともない月宮殿にいたり、仙妓白鸞に乗て舞をなす。其時楊貴妃、「なに事ぞ」と問給へば、仙妓答云、「是はこれ蛻上羽衣の曲」と云しをつたえてかゝり、其後下界にて貴妃まなびて舞し、と也。「はしなくていかゞのぼらん」とは、此心成べし。

92 一、虎眼勢作石古事

いかりある眼のうちはおぼつかない

とらのすがたは石にのこりて

木就

一句は石虎也。

格物論云、虎山獸也。其状如猫。而大如黄牛。黑章、鈞爪、鋸牙、舌大如掌、生倒刺。鬚硬尖。而光夜視。一目放光、一目看。獵人候而射之、光墜地、成白石而脅。及尾端皆有骨、如之字、長三寸許也。即其威也、破肉取之可得能令人横行。而垂尾怒吼也、声如雷、百獸為之震恐。風從而生。詩学集成二十九卷飛言門帟部在之。

へこの間三行プラス半丁分白紙

如此委しるしをきしことを、故事をあしくいたしそつしたる句の批判、ある句に云、

けふ一葉ちるやいく春日なみ草

去御方の句也。元日の発句とて、伝語する者あり。けふ一葉もゆるならば、元日になうべくと願望の御句、伝語の人あやまるか、いかんく。

93 一、銜壳故事

ひとのすがたににたるけだもの

いつくしきえみにみだれし世もありて 兼載

此術完とて、脂粉紅顔をよそひ、人の心をまどはするを傾城と云。咲にみだれし古事は、平家に委しるす。周幽王の時、褒似国を攻詰らるゝに、国主難義也。国中の高僧貴僧を頼て、何ともして周幽王を亡さんとて、狐を一疋捕て、有驗僧達是を人に祈なし、其女に約諾し、周幽王の方送渡し、幽王を誰かさんと思案をなし、高僧貴僧を頼、美人を祈なし、此美女、「王を誰か亡奉れ」と委細に約し、さて周幽王の御方へ、「我を攻つめ玉ふ事を赦免し玉はゞ、勝れたる美人を一人献ぜん」と降を乞。幽王元来女色に耽玉へば、大に悦、是を請取、褒似国を赦免。此美人狐の變化なれば、勝れたる形貌世に双なし。去程に寵愛不尋常。褒似国よりの美人なれば、其名を褒似となづけ玉ふ。然るに此美人咲事なし。明暮くすみたる昧也。「如何にもして咲はせて見」と幽王思食処に、或時民屋に火難出来す。褒似樓門より見て、「あらをもしろや」とて咲ひ玉ひしを、幽王さなきだに逢着なるが、弥恋慕して、火見て咲玉ふ程に火をみせんとて、烽火の太鼓とて、内裏に御急用の時は武士を召出さんとて拳燧を玉ふ烽火の太鼓を置く、を、褒似が為に揚げ玉ふ。軍兵共見之、内裏に事ありとて馳參れば、別に子細なし。褒似に見せ咲はせん為也とて、徒に諸軍を勞かし掃さるゝ。角くなし玉ふ事度々に及ば、後は軍兵一人も不馳參。尔し時節を窺、褒似国へ約束の如く此由を告る程に、褒似国より俄に打立、幽王の内裏へ乱入る。其時烽火を挙げ共、「例の褒似に見せ給はん為ならん」とて、武士の老人も不參、幽王亡び玉ふ古事にて、付句の心聞

ゆ。前句の「人の姿に似たる化物」という所に、「いつくしきえみにみだるゝ」と付給ふ所、すこしものがさず付やうなり。此外栄術徒傾国王道亡美人を作る詩、

驪山拳燧因褒似 蜀道蒙塵為大真

能遣明妃嫁夷狄 画工元是漢忠臣

「大真」とは楊貴妃の事、「蜀道の蒙塵」とは、玄宗皇帝郎当の事也。「明妃」とは王昭君也。「画工」とは毛延寿が事也。「当」とは、玄宗蜀道落行まします時、御駕のかざりのなる音、郎当々々ときこゆる、と也。夫より落ぶれ給ふ事を「郎当」と云也。されば、平人世に落るなどを郎当と云と也。されば平人世に落るなどを郎当といはんこと、僻なるべし。

西子紅顔傾越国 貴妃翠黛与亡唐家

雲鬢霧鬢嬋娟习

此句も栄術断腸刃也。

西施紅顔千尺劍 断尽人間寸々腸

是も前に同じ。

杜甫咲中可有刃

是句の心も、咲の中に慎あるべしと、油断あるべからず。

又殷紂の妾姫己、殷の紂を亡、日本近衛院御宇玉藻前と美人と也、王道を傾けんとせしを、安部の泰成占、玉藻を調伏せしほどに、内裏をまかり出、那須野の狐となる。是狩殺せし後、殺生石となる。是を又玄翁和尚つき碎玉ふ。



94 一、比翼連理故事

人のこゝろのかはる世中

はかなしや羽をならべし鳥べ山

此付句、比翼の鳥の古事付給ふ也。玄宗皇帝楊貴妃逢着のあまり、七月七日牽牛織女の祭に、竹竿とて願糸をかけ、思ふ事誓願する也。穿針楼（トナリ）下まで、天にあらば比翼之鳥となり、地にあらば連理の枝とならん。誓ひ給ひしも甲斐なく、安祿山に害され給へば、人の心もかはりはねをならべん鳥の誓も、はかなくなりし、と也。

いかにむすぶも契りはかなや

かれねたゞつらなる枝のはてもなし

宗祇

是は又連理にて付給ふ。

ほしをあふよも終にはかなし

天にあらば鳥ともこそは契りけれ

肖柏

此句も比翼の鳥の古事付。（舞七夕也）比翼、鸞と云鳥也。

爾雅云、南方有比翼鳥。不飛曰鸞。注云、一目一翼、二鳥相携飛と云々。私に云、雄左一目一翼、雌右一目一翼、二鳥合両と也、飛と也。

連理の枝の事、同鴛鴦の契と云事、毛詩に曰、穀則異（イハル）坐、死則同（シ）。

ハハ。是偕老同穴の契と云々。

或書に云、晋の康王の代に、韓明と云者妻女美人也。然に康王召女、

韓明不隨。仍殺韓。後又召女、不參内、自頸をくゝり死す。康王曰、

韓与婦埋一向よと也。従其塚生木成連理枝、互連理枝。康王聞召之、

被伐其木、其木又変（シテ）成鴛鴦飛去、と云々。

95 一、羯鼓樓故事

春雨は花をもよほすつゞみ哉

宗祇

此句の心は、唐の玄宗皇帝、楊貴妃寵愛のあまり羯鼓樓を建、貴妃と共に上樓撃羯鼓催花玉へば、一時に為開盛といへり。

春雨は花のときしるつゞみ哉

宗祇

此句は、皇帝の鼓を本語にふみ、さて時守のつゞみの時をしることぞ、春の雨そゝく、と也。

時守の打なす鼓声きけば時こそうつれ君は来まさず

又玄宗皇帝は尺八をも能吹玉ふ。古句に云、

十字街頭吹尺八

或説に、尺八は、貴妃にをくれて吹玉ふ故に、うれしいの聲（ナ）のまなび、ともいへり。心敬蓮歌にも、

霧ふきとをす秋の雨かぜ

尺八のうれふるこゑの身にしみて

心敬

又或句に、

吹起無常通尺八

為君吹起還郷曲 尺八声中月一輪

96 一、鄭公孝行故事

矢よりもはやきをちの川船

嵐にも薪とりてや帰るらん

宗長

夕は風のあらくふくをと

行かへりつまの谷の北南

心敬

薪とるをのかよふ山かげ

朝夕に送るや風のわたし船

賢盛

風にまかする船のかよひ路

たらちねのおやに薪を取はこび

此付句ども、鄭大尉孝なる人にて、老母をもちけるが、日々山へ上り薪を取て老母の方へはこびけるが、或時見事成矢をひとつ拾、薪にさしそへ家に帰りけるに、童子一人鄭公に逢て、「其箭は我矢也。返したまはれ」と所望する。鄭公本よりすなをなる程に、此矢をかへしければ、其時此童子兒、「我は是帝釈天よりの御使也。汝孝行不浅程に、何事成とも望のあらば叶へとらすべき、との御使也。何をか望ある」ととへば、鄭公、「我は別の望なし。親に孝のため、此川の向北成嶺にて薪をとらむと思へども、川を渡ること成難し。是を如何にもして自由せむ事をあむや」といへば、童子云、「さらば此河に舟を置て、朝には南風を吹かせ、夕には北風を吹せて、舟の自由をなさしむ」と約束する、と也。

朝<sup>ニハ</sup>南風夕<sup>ニハ</sup>北風至今号<sup>ヲ</sup>然鄭公風

去程に世間で、「朝の南風夕の北かぜは、人の身の養性也」といえ

り。

帰るさの夕は北に吹風のなみたてそふるきしの卯花

此歌も鄭公古事也。歌林良材集にあり。

97 一、陳遺飯盛

あはれにもかれ飯つゝむ旅の通<sup>融敷</sup>

おやをはごくむ道のかしこさ

宗祇

陳遺は自身食物など携者にあらねども、母に孝深くして、孝衰不計飢にのぞみ食につかるゝもやと心□かけ、飯を携けるこ、如案或時路次に労けるに、携たる飯を養し、と也。前句、伊勢物語の心なるべし。

98 一、郭巨孝母故事

おやをおしひの天のあはれび

子をうづむつちの下にも道ありて

賢盛

郭巨貧乏にて、身を覆に衣なし。家常に糧少し。殊に漢之乱れに逢て、兒と母と養がたし。生民天地の間に生じ、子々孫々連続し来、今又老母にすゝめる食を孫にあたへらるゝ程に、母瘦たるに驚て、「愛を絶する罪を取て、不孝の罪をふせぐべし」とて、妻女にかくと云。婦も亦道に不違、心を同して、兒を埋めんと坑を掘て、黄金の釜を得たる。其釜銘あり、「天賜孝郭巨。官不可奪、人不可取得」とあり。是を以遂に家富、母兒二人養得たり。

99 一、雪中の笋故事

ふかきねがひのすゑはおそろし

尋ぬれば雪にも竹の子は生ひて

專順

此付句は、孟宗老母を持けるに、煩て食なし。「何をか食の望の物あるか」ととへば、冬の事なるに、竹の子ならば望之由を云ければ、孟宗竹のある谷に分入て、雪を分て尋ぬれどもなし。仰天伏地祈天道けるに、天も感応ありけん、雪中より筍二三本生出けるを、取て帰り母にあたへければ、笋妙菓となりけん、病取直、と也。句に云、

孟宗鳴竹笋生寒谷 王祥臥水魚躍水河

秦孟宗漢王祥時代隔。其王祥も孝行にて、自ら魚取作鮓獻母。此古事の句、ありまゝに、当世郁がたの連歌に見えし、師資のためにしるしをく。

あはれみのふかきおもひしまかせきて

魚やこほりをおどり出らん

わざと作□からず。

### 101、二女班竹の故事

涙はかくも年を経にけり

紫の色こき竹の朽やらで

兼載

此まへ句、恋にても出懐にてもあれ、年をへて愁歎したると云句を、娥皇女英の付なせり。子細は、堯の御娘二人の、御名は娥皇女英を、舜へまいらせられ、御世を讓給ふ。しかるに、虞舜御狩出玉ひ、湘妃浦にて空なり給ひしを聞召、娥皇女英御跡をしたひ、かの浦に御出ありて、竹に取付而歎給ふ。其涙かゝりて紫竹となる。詩云、

瀟湘聽雨孤舟宿

滿々分明千斛愁

虞舜不帰天亦泣

余声竹半紅秋

是班竹の詩也。

拔萃故事、舜南巡不返。葬於蒼梧之野。堯二女娥皇女英追之。不乃。

至洞庭之山洞下、染竹即班。妃死、為湘水神。

尚書、堯置傾諫之鼓、舜立誹謗之木、湯自司過之人、武王

立戒慎之鞀。

### 101、誹謗木、同諫鼓故事

つゞみにもときのかはるやしらるらん

君にいさめのなきはこの御代

紹也

身のあやまりを人に問ばや

世のそしりうけじと君がまつりごと

世のかためやぶれずしてやふりぬらん

こけむすつゞみうつこゑもなし

心敬

諫鼓苔深鳥不驚 形鞭蒲朽螢空去

此句心に云。朝打三千、暮打八百、蒲の穂にて打、誠也。

打ならず人しなれば君が代はかけし鼓に苔生れけり

太平の世には、いさめのつゞみならずこともなく、能おさまると也。

又誹謗の木とは、堯王の御世何事も治りて、国土安全民豊なるうへまでも、「王道にあしきそしりもあらば、此木にしるし付て、我にしらせよ」とて、ふとき木四方にけつらせ、町の側に立置、「世間邪路

之儀を書き付よ」と定らるゝ。是を誹謗の木と云、高さ四方広さ寸尺  
もしらへしとや、可尋。年中行事歌に、

木にしるしつゞみをならず古へも猶あやまりのある世成けり

昔堯の世にも、あやまりはあればこそ、誹謗木、諫鼓をもかけし。

況末世澆季なれば、何事もあやまりおほかるべし。かへりみの心也。

### 102 一、長幹古事

古郷も見ればかりなる月澄て

すゞきつる江のなみぞはれたる 心敬

秋風の吹につけても古郷のすゞきの輪おもひこそやれ

長幹は本は呉国の者也しが、晋の王に召使しが、晋乱れんことを見、  
退き晋王へ晦を申時の語に云、「尊、鯉、鱸魚、鱸」とて、古郷へ帰と也。

### 103 一、南去雁札、北来鯉緘故事

とりなふも雁も旅をや急ぐらん

その玉札よ見るよしもがな 宗長

漢武帝臣蘇武李陵二人の大将、胡国攻遣はさるに失利、両大將生  
どられ、李陵は降参して胡国大将单于が掣になる。蘇武はとらはれて  
も单于が儀にもしたがわず。然者籠者又は一足を切、種々呵嘖せら  
るゝ。然るに、「国の恩にならじ」とて、田づらに出で落穂を拾ひ命  
をぎしに、田面の雁となれく、五言の詩を作、柏の葉にかきて、  
雁の翅に付てはなつ。其詩を雁札、雁書と云、又雁更とも云。

古籠<sup>コ</sup>岩窟<sup>イ</sup>洞<sup>ウ</sup> 送<sup>ソウ</sup>三春<sup>サン</sup>愁潭<sup>シュ</sup> 今放<sup>イ</sup>荒田<sup>ワ</sup>畝<sup>ノ</sup> 胡敵<sup>コ</sup>作<sup>ス</sup>一  
足<sup>ソク</sup> 縦曝<sup>ユビ</sup>骸<sup>カ</sup>胡地<sup>コ</sup> 魄<sup>ハク</sup>再<sup>シ</sup>事<sup>シ</sup>君<sup>キミ</sup>辺<sup>ヘ</sup>

それとばかりの雁のことづて

君があたり死しての後も立さらじ

此付句は、「それとばかりの雁のことづて」と云所を、詩の言をと

り玉しは、再び君辺につかへんと云ことを付なせり。一句恋の心、死  
ても君にそはん、と也。

北よみなみもあひおもふ中

魚によせつばさてつけし文の道 行助

此まへ句、「北よ南」といふ所に、南去北来の心を付なせり。南去  
の雁札は誰も心得る。北来鯉緘と云事、晋く人の知らぬ事也。

才学の人に尋しに、越王勾践胡国会稽山籠者し給ふ時、范蠡魚壳と  
成、荷<sup>カ</sup>寶<sup>ホウ</sup>、籠の番衆の前に至、余所事の様を、「籠中の方は如何成る  
人にて御座」と尋るに、番衆答云、「是こそ越王勾<sup>コウ</sup>と申御方なり」と  
云。范蠡、「さては音に聞き勾践にてましますか。いたはしきよ」と、  
此魚を一籠中へ捧度由いへば、「もつ共然るべし」とて、鯉をちつま  
いらする。其魚の腹のうちに文を届と也。是をみて心づき給ひ、命を  
余して、二度世をとり給ふ也。其書は白き絹一尺にかきたりし、と也。  
其文言重て委尋、かきかへまし。大方は、

昔殷陽はカタイに捕れ、文王ユウリに捕る、命を全く持玉ふ  
といふ心を、鯉書にあらはす故。

呉王夫<sup>フ</sup>疾<sup>シツ</sup>病<sup>ビョウ</sup>煩<sup>ワン</sup>ひ給ふに、医師の云、膿血の味を知らば療治せんこと

安き由を。然れ共、夫着<sup>ツキ</sup>臣下にも、此儀かくとの給ふことも憚玉ふを  
勾踐聞召及、「我命を扶られし報謝に、痲病の膿血の味をなめてまい  
らせん」との給ふ。夫差此義を深く喜、籠を許され給ひ、又籠をゆる  
されし謝に、西施と云美人をまいらせんと約諾し、万宝を尽。范蠡智、  
西子逢着ゆへ、伍子胥をもゆしなひ給ひしおりをみて、呉王夫差を乞、  
会稽の雪<sup>ユキ</sup>恥辱<sup>チヨク</sup>玉<sup>タマ</sup>ふ。

喚<sup>ウツ</sup>童<sup>ドウ</sup>煮<sup>ニ</sup>鯉<sup>レイ</sup>魚<sup>イサ</sup> 中有<sup>ユ</sup>尺<sup>シツ</sup>素<sup>ソ</sup>書<sup>ショ</sup>

是北来鯉緘の事也。

ふかくしのべる文のわりなさ

淀ごひに見えもまがはんかたゞぶな

いにしへはいともかしくしかたゞ鮎つゝみやきなる中の玉札

此歌の心は、天武天皇芳野に御座を、大伴王子うしないまいらせらる  
べき謀の企あるを、京都にまします御娘、天武の御方へ告まいらすべ  
きやうなく、御文をもきびしくしらぶるほどに、かたゞ鮎を参らせら  
るゝとて、昔の鯉書を学び、鮎の中に大友の王子御はかりのやうだい  
つげまひらせられしことをよめる歌、又此歌にて、昔のこいに今の鮎  
の中の御ふみ、よど鯉片田鮎による句也。

104 一、柿の葉の文故事 漢に御溝葉とつかいて恋也。溝渠

此故事は、唐の僖宗皇帝の宮女韓夫人と云者也。男は于祐と云士人也。

媒介人は韓泳と云者、韓夫人同姓親人也。

水のながれのすゑにあふ中

おもひしをかきの紅葉又とりあげて 宗碩

人しれずおもへばうくることのはの終にあふせのたのもしのよや  
おもふこと柿のもみちにかき付て君に

此古事は、昔大唐に、ある男内裏女房を一目みて、いかにもして此女  
房に逢たくおもへども、又とも見る事なし。余りおもひにたへかねて、  
大里へかけ入らるゝ御溝水のほとりに立寄、恋の詩をつくり、柿のは  
の色いつくしきに書いて、この水にうけて流しつれ共、水にゑがける  
たとへのごとく、あとなしごとにて、ついにぜひのをとづれもなく、  
明暮歎、年月を経しに、かの女房何のゆへやらむ、大里より御いとま  
たまはり、大裏を罷出る。さていかならん男をも便りにせんとおもふ  
に、ある人の云けるは、「我媒介と成、いかなる方にも引合せん」と  
て、又かの大里女房恋けるおとこ、「いつまで叶はぬことに、はかな  
く恋給ふべき。こゝに、みめかたちすぐれたる女房あり。是を我中立  
となり引合せん。あやなき恋をやめよ」とくどきければ、彼男、「実  
も叶はぬ年月、心をつくし歎きくらしけること、愚痴の事、さらば其  
人をむかへん」とて夫婦となる。女房も打とけたる。去男むつごと  
に男いひけるは、「われ三年先の秋の比、内裏をのぞきし時、若き女  
房を一目見しより心ひたすらあこがれて、せめて文ばかり成とも取か  
はさばやとおもひ、色／＼心をつくし、たよりをうかゞへども、さら  
にたよりもなし。せめて又すがた斗りもみて慰まんとおもひ、大里の  
ほとりにたゞずみくらしけれども、ふたゝび姿さへ見えぬほどに、あ  
まりにたへかね、色いつくしき柿のはに詩を作り、御溝水にながせし

なり」とかたる。其時彼女房のいひけるは、「我もさることありしかば、水にて手をあらひけるに、色いつくしき木の葉一、水にうかびながれ、我手にかゝり、色いつくしければ取上て見れば、恋の詩をかけり。ふしぎにおもひ、たがなしけるわざとはしらねども、今に持たり」とて、箱の底より取出し、男にみす。うたがひもなき我作りける詩なり。

此心を、人しれず思共、「念力岩を通す」といふたとへあれば、終に仰となる、たのもしき世なり、とよめり。

前之連歌も、「水の流の末にあふ」と云所に、「おもひしを柿のはの文」と、手にはの「し」を詩にもたせ、かくと云書の家を柿にもたせ作一句也。其柿のは詩、尋かきしるべし。

韓夫人者、唐僖宗皇帝の宮女也。

流水何太急、深窓尽日閑、報勒謝紅葉、好去到人間。

如此書紅葉、御溝水入。是土人于祐云者拾得、是又紅葉如此書、

會聞葉上題紅葉、上題詩寄阿誰。

如此書、紅葉御溝入、逆流スルヲ韓夫拾得ル。如此ノ千年過ニ、彼夫人帝ニ故サレ申、宮中ヲ出、同姓韓詠ガ処ニ至ル。其時于祐ニ韓詠ガ媒シテ韓夫人ト嫁ヲ作シテ、其時ノ詩、

一聯佳句題流水、十載幽思滿素懷、今日却成鸞鳳友、方知紅葉是良バイ

あらはせることばに残る罪もなし

鳥の声しるひとのかしこき 兼載

此付句の心は、公治長と云人、鳥のなく声を能聞知人也。或時鳥の鳴声、「南山に死しくあり。往て是をはまん」と鳴を聞給ひ不思議とおもひに、或女、子をうしなひ尋けるとき、公治長云、「鳥の鳴声不思議の事あり。南山のほとりを尋よ」とおしへければ、如案此兒死てあり。其時かの女、「是はうたがひなく公治長害をきて、鳥の鳴声を聞知よしを人にしられべきはかりごとなり」と佗非しむ。しかれば時の奉行、「げにも此女の申ごとく、鳥の鳴声証拠なし。急公治長を搦捕」とてとらふる。然共死罪は聊尔成りとして、籠者して番衆をきびしくをきける。公治長、「無益ごとを云、かゝるなんにあふ事、誠に口は是過門、舌是煎身刀、とは此事也」と歎給ひ、籠中居る処に、或日の事なるに、雀の鳴声をきけば、「しやうれん池の辺に、牛車の徹に当て角をくぢき、粟をこぼす。行て是をはまん」と唱由を番衆に告。番衆人を遣し是をみするに、果而詞のごとく也。番衆此由を奉行に披露す。然者、「公治長無疑鳥の鳴声を知人なり」とて籠より出し、世々是を、「あらはせることばに罪なし」と云まへ句、「鳥の声しる」と公治長のこと付給ふ也。

此こと名譽なれば、孔子、「聲にせん」との給しを、御弟子、「一たび繩を係りたる人を、子になし給はんこと口惜」といへば、孔子、「罪なくして誠にあふ事、更に恥辱に非。猶名譽なり」との給ふ、と也。縦繩をきずとも、依題目に、一代の恥辱に成事もあるべし、と也。

於日本も、鈴木三郎重家などが繩かゝりたるは、更に恥辱にあらず。さるほどに、能にも作、「なはかけ鈴木」と云なり。分別し可嗜。

へこの間六行プラス半丁分余白

106 浦嶋子の逸事

〔下1〕

右、水江に浦嶋子といふ者の、釣をして七日まで家へ帰らざりし時、海神のむすめにあひて、夫婦の契をなししかば、則わだつみみの宮にわたり、もろくのたのしみをきはめし程に、古郷の父母を恋しく思ふ心やありけん、しばらく女にいとまをこひしかば、此女玉手箱をさづけて、「二たびわがもとへ来らんと思はば、もと見し家おもなく、したしきものもなかりしかば、あやしく思ひて、「もしや此箱の中に、みしよの事やあるや」と少ひらきてみければ、しら雲の箱の中よりいで、とこよのかたへなびくと見し程に、くろかりしかみも俄に白くなり、あさましき姿に成にけり。浦嶋が子の心には、みとせの間と思ひしかども、数百年をへたる事をしらざりけり。此箱をあけざらましかば、二度仙郷に帰る事もあらまし。故に、あけてくやしき事に、のちくの歌にもよめる也。

107 松浦佐用姫領巾籠山事

〔下2〕

遠九つ人まつらさよひめつまごひにひれふりしよりをへる山の名

憶良

右、欽明天王御時、大伴佐提比古遣唐使にてもろこしえ渡りける時、其妻さよひめ名残をおしみて、松浦山に登りてきぬのひれをふり、其船をまねきしによりて、それより其山をひれふる山となづけ侍り。その事を山上憶良がよめる歌なり。彼人追和の歌、万葉集にあまたあり。松浦山は肥前国にあり。

108 為手の下帯事

〔下7〕

とき返しあでの下帯行めぐりあふせうれしき玉川の水  
山城のおでの下帯引むすび忘れはつらしはつ草の露

定家

右、これも大和物語に見えたる事也。昔うどねりなりける人、大うちの御でぐら使に大和国にくだりける。あでといふ渡に、きよげなる人の家より、女どもわらはへ出きて此ゆく人を見る。きたげなき女いとおかしげなるが、子をいだきて門のもとにたてり。此ちご、かほいとおかしげなりければ目をとどめて、「この子うちでこ」といひければ、この女よりきたり。ちかくてみるにいとをかしげなりければ、「ゆめことおとし給ふな。われにあひ給へ。おほきになり給はんほどに、まいりこん」といひて、「これをかたみにしたまへ」とて、帯をときてとらせけり。さて此子のしたりける帯をとりて、もたりける文にひきゆひて、もたせいぬ。此子ことし六七ばかりに有けり。おとこ色ごのみなりける人

なれば、いふになむありける。これを此子忘れず思ひもたりけり。男ははやわすれにけり。かくて七八年ありて、又おなじ使にさゝれて、やまとへいくとて、あでのわたりにやどりあてみれば、まへにみなんける。それに水くむ女どもあるがいふやう。大和物語諸本如此。これは水くむ女はじめよりの事をかたるを、書付たるべし。

109 くれはとりの事 付あやはとりくれはとり

〔下8〕

くれはとりあやに恋しくありしかば二村山もこえず成にき

在原諸賢

右、詞云、「くれはとりといふあやを、ふたむらつゝみてつかはすとてよめる」といへり。これは日本記に、応神天皇の御使を呉国へつかはして、あやをる女をもとめし時、呉国四人のあや織をわたせる。その中に、くれはとり、あやはとりといふ工女ある。さて「くれはとりあや」とはつゞけよめる。あやは、くれはとりよりはじまれるによりて、やがてあやの名にも用侍也。くれはとりは「呉織」、あなはとりは「穴織」とかけり。二村山は、綾二段といはんため、その山をとり出し侍る。などてかくつれなかるらんあなはとりあなあやにくの君が心やよをこめて春は来にけり朝日山くれは暮しのしるべなれば

右「くれは暮し」は、日本の使を呉国へつかはす時、高麗王の所へみちしるべをこひしとき、久礼波久礼志と云二人のみちびきを

いだして、呉国へ案内せしめし事也。おなじく日本記応神記に見えけり。

110 葛城王賜橋姓事

〔下9〕

橋は実さへ花さへその葉さへ枝に霜をけましてときは木 聖武天皇

右、聖武天皇天平八年冬十一月、井手左大臣諸兄公、いまだ左大弁で、かづらきのおほきみと申侍りし時、御前にありける橋をたまはせて、すなはち姓にめされけるより、たち花氏ははじまれり。その時の御製、万葉集にのせ侍り。

111 奥州金花山事

〔下10〕

すべらきの御代さかへんとあづまなる道のく山に金花咲 家持

右、聖武天皇の天平感宝元年に、みちの国の小田といふ山にして、はじめて金をほり出し侍し時、大伴家持長歌をよみて奉りし、其反歌三首の一なり。是によりて年号に感宝の二字をくはへられ侍り。

112 岩代の結松事

〔下11〕

いはしろのはまがえをひきむすびまさしくあらば又かへりこん

有間王子

右、有間皇子は孝徳天皇の御子也。斉明女帝の御時、蘇我赤兄と心をおなじくして、御門かたぶけんとせしが、紀伊国岩代と云所



にありて、心ざしのとげがたからん事をうれへて、其所にありける松の枝をむすびて、手向として此歌を讀置で、外へ出侍し其間に、赤兄がしかく／＼のよしを御門へ申侍し。そのかへり忠によりて、有間皇子の謀反の事あらはれて、つゝに藤白坂にしてころさせ侍り。のち／＼の人此まつ的事よめる歌、おなじく万葉集のせ侍り。

岩代の野中にたてる結松心もとけぬむかしおもへば 意吉磨

113 三輪しるしの杉事

〔下12〕

我庵は三木の山本恋しくはとぶらひきませ杉たてる門 読人しらす

右歌、顕昭法師云、三輪の明神の御歌に申説あれど、たしかにしりがたし。たゞ三木の山の辺に住ける人のよめるなるべし。此歌を本にて、しるしの杉と云事はよみならはしたるにこそ。拾遺集にも住吉明神の侘宣の歌としてのせ侍り。

114 葛城久米路橋事

〔下13〕

中たえてくる人もなきかづらきのくめぢのはしは今もあやうし

岩橋のよるの契りもたえぬべし明るわびしきかづらきの神

右、くめぢの橋の因縁は、文武天皇の御時に、かづら木の役の優婆塞といふ人あり。姓は賀茂氏、名は小角といへり。大和国葛城の上の郡の人なり。卅余年かづら木山の岩屋の中にあて、藤の皮をき、松の葉をすきておこなひしが、孔雀明王の呪ならひて、あ

やしき験をあらはして、雲にのり仙人の城にもかよひ、おに神をもしたがへて、水をくませ、薪をひろはせなどしけり。ある時かづらきの峯より、よしのかねの御たけの間に、橋をつくりてかよひちとせんと思ひて、かづら木の明神一言主の神に、「これをわたせ」といふ。明神うれへなげ／＼ど、のがれんかたなし。わぶ／＼大なる石を運て、はしをつくる時、ひるはかたち見ぐるしとて、

「よる／＼わたさん」といひければ、行者いかりをなして、呪をもて神をしばりて、谷の底に置つ。文武天皇の藤原の宮におはしまし、時、かづらきの明神、宮人につきて申さく、役のうばそく、国をかたふげんとす、はやくいましめらるべきよしを奏す。御門驚給て、使をつかはしてからめしめんとし給に、空をとびてからめられず。わづかに母をめしとられしかば、行者、母にかはらんとていできたり。すなはちからめとりて、文武三年己亥の年五月に、伊豆の嶋にながしつかはす。流人になりながら、あるひは海のうちへをありき、あるひはふじのだけにかよひなどしける、と也。

115 うぐひすの卵 中郭公事

〔下16〕

右、いまの世にも、まれ／＼鶯の巢より時鳥のひなをうる事あるといへり。おやににざるによりて、「さが父には似て、さが母には似ず」とよめる也。

116 山鳥の尾の鏡の事

〔下19〕

山鳥のをろのはつおにかゞみかけとなふべみこそなきこそりけめ

人丸

右、山鳥のかゞみの事、ふるくより二やうに申。一は、鸞と云鳥は、鏡にをのが影を照してなくと云り。鸞はすなはち山鳥也。一は、山鳥は女を一所にはねず、山の尾をへだてゝぬるが、あか月にをどりのはつおに、めどりの影のうつる事あるをみて鳴を、かゞみとはいへり。誠の鏡にはあらず。をろは雄也。ろは助詞也。はつ尾は、なきお也。雄のなきおと云心なり。

117 鳩ふく秋事

〔下20〕

ますらをの鳩ふく秋の音たてゝとまれと人をいはぬばかりぞ  
右、鳩ふくは、秋のはじめ、かり人の鳩をとらむとて、手をあはせてはとのまねをしてふく事を云也。又獵士（ヤマト）の鹿まつにも、人とめんととも、又人にことありとせんととも、鳩ふく事をする也。此歌は其心なり。

118 野守の鏡事

〔下21〕

はし鷹の野守のかゞみえてしがな思ひおもはずよそながらみん  
右、雄略天皇と申御門かりを好み給て、野に出てかりし給けるに、御鷹そりて見えず。野守をめしてとはれけるに、御たかのあり所を申す。「いかにしてこゝにみながら、たな心をさすがごとくにさだかに申ぞ」と、はせ給ければ、此野に侍る水に、たかの影が

うつりて侍りつれば申よしを奏しけるにより、野にある水を、はしたかの野守の鏡とは申つたへたり。

119 井もりのしるしの事

〔下22〕

ぬぐくつのかさなる事のかさなればいもりのしるし今はあらじな  
右、井もりは守宮といふ虫也。古き井などに、とかげに似て、おながき虫の、てあしつきたるをいふ。法花経嘉祥大師の義疏に見えたり。いもりの血を取て、女のひぢにぬれば、私の情有時、洗ともおちず、といへり。是によりて、宮をまもるとはなづけ侍り。宮（ミヤ）に女のある所なれば、女を守護する心になづけ侍り。又張幸（チヤウキョウ）が博物志といふ書には、るもりに朱をかひてあかくなして、そのちをととりて女の身にぬれば、一期の間うする事なし。もしわるきふるまひをすれば、きえうするよし見えたり。内典外曲（ウチノミタマ）の説相違あるなり。「ぬぐ沓のかさなる」といふは、女のみそか事するおりに、はき（ハキ）なるくつの、をのづからかさなりてぬぎをかるゝ、といへり。さてかく読り、

わするなよたぶさにつけし虫の色のあせなば人にいかゞこたへん

120 錦木事

〔下23〕

にしきゞは千づかに成ぬ今こそは人にしられぬねやの中みめ  
徒に千づか朽ぬるにしきゞを猶こりずまに思ひたつかな  
右、にしきゞは、一説云、おくのえびすの男女、よばゝんとては

永実

文をやることはなくて、一尺ばかりに木をまだらに色どりて、其女の門にたつれば、あはんと思ふ時は千づかに成て取入也。あはじとおもふ人には、とり入ざるによりて、ちづかになりて朽よしよめる也。此外、灰の木を錦木と云説あり。袖中抄にしろせり。

121 反衣見夢事 付袖を返す事

いとせて恋しき時はむば玉の衣を返してぞきる

小町

〔下26〕

右、衣を返してぬれば、恋しく思ふ人の夢にみゆると云事、昔よりいひ伝たる事也。袖かへすと云も同事也。

122 猿沢の池に身なげたる采女事

〔下30〕

わざもこがねくたれがみをさる沢の池の玉藻とみるぞかなしき

人丸

右、大和物語に云、昔ならの御門につかうまつるうねめありけり。かたちいみじうきよよにて、人くよばひけれどあはざりけり。そのあはぬ心は、御門をかぎりなくめでたき物になん思ひ奉りける。御門めして、さて後又もめさざりければ、限なく心うと思ひけり。よるひる心にかゝりておぼえけれど、御門はさしもおぼしめさず。さすがに常には見たてまつれ、猶世にあらるべき心ちもなかりければ、みそかにいで、猿沢の池に身をなげてけり。御門はかくともしろしめさざりけるを、事の次にひとの奏しければ、きこしめしていといたくあはれがり給ひて、池のほとりにおぼん

御ゆきし給て、人く歌よませ給ける時、人丸よめる歌、上にいへるがごとし。

123 しぎのはねがきの事 付しぢのはしがき

〔下32〕

暁のしぎのはねがき百はがき君がこぬ夜は我ぞ数かく 読人不知

右、昔あだなる男をたのむ女ありける。こぬよのかずはおほく、くるよの数はすくなかりければ、かのこぬよのかずをかく事なん、暁の鳴の羽かくよりもおほかる、といふ事なるべし。

124 八橋蜘蛛手事

〔下33〕

右、参河国八はしと云所あり。橋の八あるなり。「くもで」とは、橋のはしらにつよからしめんために、すぢかへて打わたしたる木を、くもでとは云也。又蜘蛛と云虫のては八あれば、八はしといふによそへて、「くもでに物を思ふ」とよめるにや。伊勢物語に、「水のくもでにて、橋を八わたせり」といへり。これはくもでに水のながれたるを云にや。いさゝか其心かはれり。蜘蛛と云事は、八はしならでも読る也。

125 末松山事 付末松事

〔下36〕

右、昔男女のありけるが、末の松山をさして、「かの山に浪のこえなん時ぞ、わするべき」と契けるが、ほどなくしてこと心付てけるにより、人の心かはるをば、「浪こす」と云なり。彼山に、

まことに波のこゆるにはあらず。問あなの海のはるかにのきたるにたつ浪の、かの松山のうへよりこゆるやうにみゆるを、あるべくもなき事なれば、「まことにあの浪のこえん時ぞ心はかはるべし」と、ちぎれる也。能因歌枕に、本の松、中の松、末の松とて三重にあり、ていへり。さればにや、山とはいはで、たゞ「末の松」とよめる事も侍り。

126しのぶもぢずりの事

〔下37〕

右、陸奥國の信夫郡に、もぢずりとて、髪をみだしたるやうにすりたる物を、「忍ぶもぢずり」といふ也。

右、「むさしのゝわかむらさき」とこそ云ならはしたれど、これは春日の里にてよめる歌なれば、「春日のゝわかむらさき」とつゞけ侍り。「むさしのはけふはなやきそ」の歌をも、古今には、「春日野」と書かへたり。思所成べし。

127宇治橋姫事 一宇治玉姫

〔下38〕

さむしろに衣かたしきこよひもや我を待らん宇治の橋姫又ハ玉姫 読人不知

右、宇治の橋姫とは、姫大明神とて、うちの橋の下におはする神也。其御もとへ、宇治橋の北におはする離宮と申神の、夜ごとにかよひ給ふとて、暁ごとにおびたゞしく浪たつ音のするとなん、彼辺トの公民は申ならはせり。此歌は離宮の御歌と申。又陸源阿闍梨と申物は、住吉の大明神の、うちの橋守の神に通給ふと申故に、

此歌は住吉の明神の御歌、といへり。

128武隈松事

〔下39〕

右、奥州たけくまといふ所に二木の松あり。これによりて、「子もたる」ともいへり。「はなは」とは、山のさしいでたる所のあるをいふなり。

たけくまの松は二木を都人いかゞと、はゞみきとこたへむ 橋季通

右、詞云、「則光朝臣のともにもちのくにくだりて、たけくまの松をよみける」と云々。

129野中の清水事

〔下45〕

いにしへの野中の清水ぬるけれどもとの心をしる人ぞくむ

読人不知

右、野中の清水は、播磨國いなみ野に有。昔はめでたき水にてありける。末の世にぬるくなりぬれど、昔をきつたへたる物は、これを尋てのみける心也。能因歌枕には、野中のしみづは、もとの妻をいふ、といへり。

130篠田松杜の千枝事

〔下47〕

いづみなるしのだの森のくすの木の千枝に別て物をこそ思へ

右、しのだの杜には、楠木の一本はびこりて、千枝にわかれたる、といへり。これによりて篠田杜には、千枝と申事を讀る也。

131 小花が本のおもひぐさ事

[下 48]

道邊のお花がもとの思ひ草今さらになぞ物をおもはん

右、思草は草の名にはあらず。たゞ草を云なるべし。

132 常陸帶事

[下 52]

あづまぢの道のはてなるひたち帯のかごと斗もあはんとぞ思ふ

俊頼抄云、ひたちの国に、かしまの明神と申神の祭の日、女のけ

さう人のあまたある時に、のりを布の帯にかきつけて、神の御前

にをく也。おほかる中にすべきおとこの名かきたるをば、をのづ

からうらがへる也。それをとりてねぎがえさせたるを女見て、さ

もと思ふ男の名ある帯なれば、やがて御前にて其を聞て、男がう

ちかゝりて、したしくなりぬ。たとへば占などのやうなる事也。

133 おにのしこ草の事 し國と云は如何

[下 56]

忘草わが下紐につけたれば鬼のしこ草ことにし有けり


右、是は家持が坂上家大娘にをくる歌也。離絶数年、後会相聞往

事歌、といへり。たとへば、たえてひさしき女にあへる歌也。歌

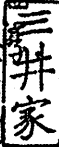
の心は、わすれんとすれども、え忘す、と云心也。鬼のしこぐさ

は、紫苑の名也。物忘れぬ草也。頭は、歎ことあらん人は、うへ

てみるべからざる草、といへり。



一	五	九	三	七	二	六	十	四	八	二	六	十	四	八	二
王昭君	孟三遷	宮守	傳悦	二月花	文王語	山梁	孔子語	孔子語	燈臺鬼	麒麟	真耳	論語	真耳	敬先	敬先
二	六	十	四	八	二	六	十	四	八	二	六	十	四	八	二
卞和玉	太公望	芦花絮	歎度	麒麟	須耳	論語	須耳	聚電雷	麒麟	須耳	論語	須耳	聚電雷	麒麟	須耳
三	七	十一	五	九	三	七	十一	五	九	三	七	十一	五	九	三
珊瑚樹	燕丹太子	老馬知道	麒麟	麒麟	須耳	論語	須耳	聚電雷	麒麟	須耳	論語	須耳	聚電雷	麒麟	須耳
八	二	六	十	四	八	二	六	十	四	八	二	六	十	四	八
司馬	司馬	碑文	碑文	碑文	碑文	碑文	碑文	碑文	碑文	碑文	碑文	碑文	碑文	碑文	碑文



三井家  
季廣將軍

Original Defective

<p>七 佛 八 道 九 玉 十 臺 十一 誰 話</p> <p>梁武帝 香磨覺 紫婆 三 車</p> <p>五 華 送 發 心 會者離別 三歲兒童</p> <p>九 智 惠 一 樹 陰 好 事 雷 光</p> <p>三 梅 檀 自 化 破 止 歡 佛 法</p> <p>七 四 門 隨 上 世 間 夜 壁</p> <p>晚 學 抗 裂 心 十 日 菊 蝸 牛</p>	<p>五 會 者 流 水 文 武 周 穆 王</p> <p>二 兒 童 庭 訓 梅 婦 人 漢 笛</p> <p>七 高 祖 歡 吹 大 守 星 大 吹</p> <p>五 仙 京 漢 武 帝 龍 門 雲 山</p> <p>九 飲 酒 破 為 佛 塔 伯 母 捨 雞 足</p> <p>二 鷄 八 邑 趙 淚 數 息 歡 敢 念</p>
--	---

<p>二 岩 代 諾 松 三 輪 五 萬 城 乘 橋 當 之 卵</p> <p>七 山 鳥 尾 鳩 妙 秋 野 守 井 守</p> <p>五 錦 木 友 衣 袿 沢 池 鳴 の 羽 丸</p> <p>九 八 橋 末 松 山 奇 奇 奇 宇 治 橋 姫</p> <p>三 武 限 松 野 中 清 水 篠 田 松 尾 花 下</p> <p>常 陸 草 鬼 心 心 草</p>	<p>五 安 部 佳 吉 馬 麻 五 兩 十 風</p> <p>九 巨 灵 神 六 欲 天 列 子 鶴 寫</p> <p>七 虎 眼 街 賣 比 翼 鴉 鼓</p> <p>二 鄒 大 尉 陳 遺 郭 巨 孟 宗</p> <p>五 二 女 彈 龍 誘 木 長 袴 野 馬 扎</p> <p>九 柿 葉 文 公 治 長 浦 鴻 子 松 浦 佐 周 雅</p> <p>升 子 帝 異 服 葛 城 王 奧 列 金 花</p>
---	--